

42214

教科書文庫

4
810
42-1925
2000 64980

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

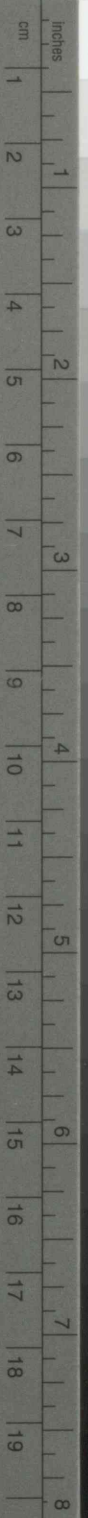


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Ya 20  
資料室

現代  
女子國語讀本  
卷十



資料室

3759

教育部檢定  
大正四十二年七月一日  
高等女子學校國語科用

02



八波則吉編

現代女子國語讀本

株式會社  
東京  
成俵  
藏版



現代女子國語讀本 卷十

目次

前編

- 一 藝術とは何ぞや……………黒田 鵬心……………一
- 二 歩み求めるものの心(詩)……………山口宇多子……………八
- 三 根……………和辻哲郎……………二
- 四 秋宵雜記……………與謝野晶子……………三
- 五 白村語錄……………厨川白村……………三
- 六 月夜の美感……………高山樗牛……………三

目次

資料室

3759

文部省檢定  
高等女學校國語科用  
大正四十二年七月

02



八波則吉編

現代女子國語讀本

株式會社東京成俵館版



現代女子國語讀本 卷十

目次

前編

- 一 藝術とは何ぞや……………黒田鵬心……………一
- 二 歩み求めるものの心(詩)……………山口宇多子……………八
- 三 根……………和辻哲郎……………二
- 四 秋宵雜記……………與謝野晶子……………三
- 五 白村語錄……………厨川白村……………三
- 六 月夜の美感……………高山樗牛……………三

目次

一

七月を眺めて(詩)……………室生犀星……………四一

八 忠義の二字……………古谷久綱……………四四

九 ハルビノの朝嵐(詩)…………………………四七

一〇 噫伊藤公……………徳富蘇峰……………四四

一一 近松とシェークスピア……………坪内逍遙……………五七

一二 遍路行願……………萩原井泉水……………五五

一三 女性の求める宗教……………内ヶ崎作三郎……………七〇

一四 思想と言語……………大橋房子……………七六

一五 翻譯……………日下部重太郎……………八七

一六 孝女白菊(節録)…………………………八九

一七 柿の枝ぶり(詩)……………武者小路實篤……………九四

中編

一 小野の深雪……………(伊勢物語)……………九七

二 古文錦繡…………………………一〇〇

一 わかれ……………(土佐日記)……………一〇〇

二 木の花は……………(枕草子)……………一〇二

三 はしたなきもの……………(枕草子)……………一〇四

四 遺言……………(大鏡)……………一〇五

五 薬師佛……………(更科日記)……………一〇六

三 年ふる鯉……………松平定信……………一〇八

四 夢應の鯉魚……………上田秋成……………一一二

五 出世景清……………近松門左衛門……………一二三

六 高砂(謡曲)……………一三三

七 田子の浦曲……………井上通女…一四二

後編

(自修文)

一 ジュリヤス、シーザー……………シェークスピア…一四七

二 自然の個性化……………一五三

三 夢の文學と現の文學……………五十嵐 力…一六七

四 ヘレン、ケラー……………(少女畫報)…一七三

五 青蛙先生……………正木不如丘…一八三

六 出 廬(詩)……………土井 晚翠…一八六

現代女子國語讀本 卷十

前編

一 藝術とは何ぞや

黒田 鵬心

藝術は人間精神の感情的發現であるが、その感情は美的感情でなければならぬ。美的感情とは美學上の謂はゆる美の材料と形式と内容によつて生ずる感情をいふ。材料感情とは色と形と音によつて生ずる感情で、花の赤色が美しいとか、瓣の形が美しいとか、ピアノの音が快いかい

一 藝術とは何ぞや

黒田鵬心  
名は朋信、東京市の人、明治十八年生

一

ふやうな感情をいふ。形式感情とは、花の赤色と葉の青色の對比が美しいとか、花瓣が漸層的に配列されてゐて美しいとかいふやうな感情をいふ。内容感情とは自然と人生のすべての状態や活動によつて生ずる感情をいふので、自然でいへば、山の優雅な感じとか、日没の崇高な感じとか、人生でいへば、再會の喜びとか、近親を失つた悲みとか、またユ  
ーモアとかコミックとかいふやうな感情をいふ。此等はHumour  
Comic  
すべて美的感情である。そして、この感情の表現が藝術となるのであるが、美的感情のあらゆる表現はすべて藝術であるとはいへない。美的感情の表現が藝術となるのには種々の條件がある。

第一の條件は、美的感情の表現は客観性を帯びてゐなければならぬことである。主観性に限られた表現は藝術にはならない。單に自分一人だけが或景色を美しいと感じて描いても、それは藝術にはならない。無論等しく人間である以上、或一人の美しいと感じる景色は萬人ともにこれを美しいと感じずるから、もとより客観性がある譯ではあるが、稀には自分だけの感情を描いて得意になつてゐるものがある。他に一人でもこれに共鳴するものがあれば、狭いながらも客観性がないとはいへないが、萬人不可解のものには藝術とはいへない。これに反して、古今東西の人が感嘆するやうな廣大な客観性を有するものは、多くは偉大な

藝術である。小人數にだけ理解される藝術は、褊狹な非常識的な藝術である。勿論新しい藝術は、いつの時代でも、どの國でも、最初は多くの人に理解されなくて、狭い客觀性を有するだけであるが、それが偉大な藝術なら、後人にも外國人にも理解されて、遂には廣大な客觀性を持つやうになるものである。徳川時代の浮世繪が明治時代になつて外國人によつて理解されたために、始めて價値を認められたのはその好例である。偉大な藝術はいつかその眞價を認められて、永くその生命が續くものである。眞に「人生は短く藝術は長い」といふべきである。

第二の條件は、美的感情の表現は假象でなければならな

い、即ち實在であつてはならないことである。例へば、どんなに美しくても實際の景色は藝術でない。これを紙に描いて、假象のものとなつて始めて藝術となるのである。また近親を失つて悲しんでゐるのは藝術でない。その悲みを歌に詠じて始めて藝術となるのである。俳優が火事で近親を失つた有様を舞臺の上で演ずるのは藝術であるが、實際子が親を失つたのは藝術でない。即ち假象でないものは藝術とはいへないのである。

第三の條件は、美的感情の表現は無關心でなければならぬことである。即ち藝術は利害關係から全然離れることを要する。繪を描くにしても、これを賣つて生活費を得

ようとか、これによつて人氣を博しようとかいふ考があつてはならない。感情的發現そのものを最終の目的とすべきて、利害關係が念頭にあつてはならない。また繪を見るにしても、それを買つて所有したいとか、今買つておいたら他日値が上るだらうなどと考へるのは物欲、利欲で、藝術鑑賞の態度ではない。藝術品には無論市價といふものがあるが、それは藝術そのものの價値ではなくて、經濟的物品としての市價に過ぎないのである。随つて市價は必ずしも藝術としての優劣に比例しない場合が多い。

藝術となるべき美的感情の表現は、右に述べた通り、客觀性を帶び、假象であり、無關心であることが必要であるが、更

に藝術家の個性を帶び、獨創的の分子を含み、且時代精神と國民性を現したものでなければならぬ。普通の藝術品は一個の藝術家が製作するものであつて、その個人の美的感情の表現であるから、個性を帶び、また獨創的の分子を含んでゐるのは當然である。若しそれが單なる模倣に止まつて、少しも個性を帶びず、獨創的分子を含んでゐなければ、藝術としての價値はない。また藝術の性質上、一個の藝術家では製作することが出来ないもの、例へば、大きな建築や大きな壁畫のやうなものは、多數の藝術家によつて製作されるから、自然に時代精神及び國民性を表現する。また一個の藝術家の作品でも、その藝術家がその時代の國民の一



員である以上、その藝術もまた時代及び國民の産物として、時代精神と國民性を現すやうになるのが當然である。以上述べた所を約言すると、藝術は美的感情の表現であつて、その表現は客觀性を帯び、假象であり、無關心であるべく、更に個性を帯び、獨創的分子を含み、時代精神及び國民性を帯びるべきである。(藝術概論)

## 二 歩み求めるものの心

山口宇多子

長い絶えない道を探しに歩き出してからもう久しい。願はくはそこに日光が輝いてゐてほしい。が、灰色でも仕方がない。絶えないことが私の切な願

山口宇多子  
東京市の人、  
明治三十二年  
生、詩人

## 望だ。

私は今その道について空想してゐる餘裕を持たない。この惑ひやすく道草しやすい心が、今度こそ丹念に探し求めることに全力を挙げようとしてゐるのだ。

「全力を挙げようとしてゐる。」その状態が私だ。今までの「時」の浪費、それが私の貧しさを示すものであつても、何かその内に恵まれたものがある。が、さあ、今は強い力の籠つた歩調あしどで行脚をしつづけよう。

どんな迂廻した道であつても、或は道のない森に迷ひ

込んでも、

それが前につゞく道の前提であつてほしい。

天候がどんなに變らうとも、

行く先々の景色を均等な眼で眺めて行きたい。

日光の下にあるものにも、

灰色の空の下に重く沈んでゐるものにも、

同じ親しさで近づきたい。

さあ、長い道を探し求めに歩みつゞけよう！

それがどんなものであつても、絶えない長い道であつ

てほしい。(日本詩集)

和辻哲郎

兵庫縣の人、  
明治二十二年  
生、文學者、  
京都帝國大學  
助教授

### 三 根

和辻哲郎

一  
松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が  
地中でどうなつてゐるかは、あまり考へて見たことがなか  
つた。美しい赤褐色の幹や、割合に色の浅い清らかな緑の  
葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がし  
てゐた。雨が降ると、幹の色は、しつとりと落着いた潤ひの  
ある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをら  
しい色艶を増して来る。降雨の後で太陽が輝き出すと、早  
朝のやうな爽かな氣分が、樹の色や光の中に漂うて、いかに  
も朗かな生の喜びが其處に躍つてゐるやうに感じられる。

折節可愛い小鳥の群が活き／＼とした聲で囀りかはして、  
緑の葉の間を楽しさうに往き來する。それが私の親しい  
松の樹であつた。

然るに、或時私はその松の樹の生育つた小高い砂山を崩  
してゐる處に佇んで、砂の中に喰込んだ複雑な根を見守る  
ことが出來た。地上と地下との姿が何とひどく相違して  
ゐることだらう。一本の幹と、簡素に竝んだ枝と、楽しさう  
に葉先を揃へた針葉と、それに比べて、地下の根は、戦ひ、もが  
き、苦しみ、精一杯の努力を盡したやうに、枝から枝と分れて、  
亂れた女の髪 of 如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思は  
れる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついて

ゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてゐた。  
併し、それを目前にまざ／＼と見た時には、思はず驚異の情  
に打たれぬ譯にはいかなかつた。私は永い馴染の間に、こ  
のやうな地下の苦みが、不斷に彼等にあることを一度も自  
分の心臓で感じたことはなかつたのである。彼の苦みの  
聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦し  
さうな顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續  
いた後であつた。併し、その叫や萎れた顔も、その機會さへ  
過ぎれば、すぐに元の快活に歸つて、苦みの痕を滅多に後へ  
残さない。而も彼等は、我々の眼に祕められた地下の営み  
を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も

葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實にこのやうな苦勞の上にだけその存在が可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹ばかりでなく、あらゆる植物に心から親みを感じるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐることだが、私は新しい事實としか思へなかつた。

二

私は高野山へ登つた。さうして不動坂に差掛つた時に、數知れず立竝んでゐるあの太い檜の木から、何ともいへぬ莊嚴な心持を押付けられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を擇んだ弘法大師の見

高野山  
和歌山縣

弘法大師

名は空海、高僧、讃岐國の人、高野山金剛峰寺の開祖、承和二年(四九〇)歿、年六十二

識にもつくづく敬服するやうな氣持になつた。

それは外廓に連る山々によつて平野から切離された急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか解らない老樹



弘法大師

たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷のない、壯大な力強さを以て天を目指してゐる。さうして、樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた／＼と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營みは既に地上一尺の處に明に現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な根は力限り四方へ擴がつて、地下の岩にしっかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入交つて、薄い地の層の間に複雑に絡み合つてゐる有様は、想像するだけでも我々に驚異の情を起させる。

確かに山は烈しい生の力の營みによつて残る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見ることは出来なかつたが、併し、一種の靈氣として感ずることは

出来た。隠れた努力の威壓が神祕の影さへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして、地下の營みに没頭することを自分に誓つた。今氣付いてもまだ遅くない。

三  
成長を欲するものは、先づ根



寺 峰 剛 金

を確かに下さなくてはならぬ。  
上に伸びることばかり欲するな。先づ下に喰入ることを努めよ。

四

早年で成長の止まる人がある。根を疎かにしたからである。

四十に近づいて、急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰入ることに没頭したからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭腦と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしないう人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分

のやうなものは生きる値打もないときへ思つてゐる。併し、それは彼の根が地殻に突當つてそれを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。私は彼の前途を信じてゐる。——根の確かな人から貧弱な果實が生れる筈はないから。

五

古來の偉人には雄大な根の營みがあつた。それゆゑに、彼等の仕事は味へば味ふほど深い味を示してくれる。現代は、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐるは

しないか。いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、總べてが餘りに人工的である。限られた土壞の中で纖細に發達した根は、深い土地に移されても、自由にその手足を伸すことが出来ない。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

六

根のためには、出来るならば地の質を擇ばなくてはならぬ。果實のためには、出来るならば根を培ふ肥料を擇ばな

くてはならぬ。

四 秋宵雜記

與謝野晶子

與謝野晶子  
與謝野寛の  
妻、もと風氏、  
堺市の人、明  
治十一年生、  
歌人

人間の世界は、いろ／＼の力が交錯し、反撥し、協補し、沸騰する中に、微妙な螺旋狀の過程を取つて推進して行くやうです。或時は沈滞すると見えても、それは次に來る飛躍の準備であつたりして、一概に目前刹那の局面だけを見て、全體を斷定することは出来ないと思ひます。譬へば、航海するのと同じやうです。風波にも出會へば、靜かな風にも出會ふのが航海の常態です。無限に變化を續けて行くの

が人生ですから、誰にも未來の豫想の出來ないのが當然です。人間の運命は樂觀して考へることも出來れば、その反對に、悲觀して考へることも出來ます。かういふ二つの大きな人生觀を容れることが出来るほど、それほど人生は茫漠として、不可測の、絶大無限な進化行程を持つてゐるやうです。

しかし、たゞ一つ斷言し得ることは、人間の世界は少しづつ善くなつて行くといふことです。このことは、五年目乃至十年目に、世界の廣い範圍に亙つて、若しくは狭い自己の周圍だけについても、過去を振返つて觀察して見ると明瞭に解ります。例へば、今日の資本家・労働者・婦人・小兒兵士の

思想や知識を見ても、十年前の其等の人々が全く持つてゐなかつたものを持つてゐるではありませんか。

人間は次から次へと欲望を起し、そして、その實現に努力します。欲望は無限で且自由ですが、實行は各人の能力に制限され、また各人相互の欲望の相違にも制限されますから、世界には實現されない欲望が無數にあるとともに、今日實現されないでも、他日實現される欲望もあります。今日の人間の力では實現することの出來ない欲望でも、いつか萬人共同して容易にこれを実現する日がないとは限りません。



それで、個人が一旦善いと認めたことでも、それが目前に實現されないからといつて、決して絶望してはなりません。人間は誰も悪くならうと思つてゐるものはなく、反對に、大いに善くならうとしてゐるのですが、内にこれを妨げる不良な本能が多く残つてゐると、外に前代から傳はつてゐる頑固な社會的習慣が邪魔をするので、人間の文化的進歩は案外に遅々としてゐます。或一面だけを見ると、人間は野蠻人も文明人も大した相違はないと思はれるぐらゐに進歩してゐない點のあるのは事實ですけれども、その進歩した方面を見ると、人間の持つてゐる文化的欲望がよくもこんなまでに急速に實現されたものだと思ふ感歎せずには

ゐられないでせう。

×  
人生はその一面を注視することも必要ですが、また、これに拘泥しないで全體を達觀することも大切です。さうすることによつて、人間は目前の悲觀に沈まず、目前の小成に安んぜずにあることが出来ます。また、欲望の實現を何の見さかひもなく急いで、遮二無二突進して無駄骨を折るといふやうな過失をも尠くすることが出来ます。

全體を達觀しながら、同時にまた目前の注視をも怠らない人は、欲望の實現に慎重な考慮を拂つて、或理想については、一人や二人の少數者の力で實現されるものでないこと

を知り、併せて永い時間と多人數の協力とで次第に完成されて行くものであることを知つてゐますから、それが個人の力で目前の時代に遂行されるといふやうな誇大な妄想に陥つたり、それが出來ないと、その理想にまでも失望するやうな愚痴な態度を示したりすることはしないでせう。

誰も自分のことは自分が最もよく知つてゐると考へてゐます。果してさうでせうか。それは自分が特に反省と注意と批判を向けてゐる方面だけについていふことは出來ませんが、その他の無意識な方面、反省と注意の不足してゐる方面、また意識してゐても批判を等閑にしてゐる方面な

どについては、反對に、我が身に我が身が解らない。といふ方が當つてゐると思ひます。自分の短所を誇つたり、自分の醜さを知らなかつたりする事例は澤山にあります。

かういふ缺陷を補ふためにも、教育や批評や忠告が必要だと思ひます。自覺といふことは結構なことですが、自分一人ですることの出來る自覺の範圍は案外に狭いものですから、他人に聽いて相互に補充するといふ用意が大切です。さうでない、その自覺が獨斷と褊狹に陥つて、社會協同の生活に融和しにくくなります。

人の性格は個別的に分れ、その個別的なものが幾多の姿

態に分れて、甚だ複雑になつてゐます。ですから、その人の一面だけ見てその性格を斷定するのは、雲の形を一言で要約するのと同じく亂暴なことです。

何々主義者だなどといはれる人々が、果してその主義の下に統一された實際の生活を送つてゐるかといふに、決してさうでないことを發見します。現實主義を口にする人に、案外唯美主義的な點やRomanticロマンチックな點を發見します。氣をつけて見ると、誰にも矛盾した種々の性格が備はつてゐるのに驚かされます。「薔薇に刺」といひ、「鬼の目に涙」といふやうに、二律相反の並存してゐるのが、實際に生きてゐる人間の性情の全部的真相です。主義といふやうなものは、

大抵の場合に人間の性格の一面だけを誇張したものです。それだけで個人の生活を律しようとする、扞格の生ずるのが當然です。それで押通すことは不可能です。

鏡といふものが一面しか見せてくれないものであるのはよい。三方四方に鏡があつて、それが同時に自分を見せるものであつたら、人間はどんなにか神經過敏にならねばならないこととせう。

人間は自分自身でさへ自己の一面を見てゐるので氣安いのです。自己の足りない點や醜い點がすべて自分に解つたら、絶えずいらくゝと氣を遣つて、落着いてはゐられな

いでせう。まして幾人も聰明な人々に四方から眺められて、峻巖細緻な批評を浴せられるやうなことがあつたら、どんなにか堪へられないでせう。そこで、優れた批評家といふものは、他の長所を多く擧げて、その短所を少く擧げるだけの愛情を持つてゐるものだといふことです。

### 五 白村語録

厨川白村

○ 死の彼方に新しい生があるなら、そして、現在の生活がその過程であり準備であるなら、この世界で無駄なことはし

厨川白村  
名は辰夫、京都市の人、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授、大正十二年歿、年四十四

てゐられない。

○ 誰にでも出来る仕事を人より早くしたからといつて、そんな仕事は碌なものでないから、誇るに足らぬ。眞の仕事は創造であらねばならぬ、いつまで待つても他人には出来ぬ仕事であることを要する。さういふ仕事は何れも貴い。文化はさういふ仕事の集積だ。

○ すべての主義を肯定すると矛盾が生ずる。その矛盾のあるところに人間生活の複雑性があり、人間苦がある。金も貴いが道德も貴いといふやうな工合で、そして、思想家も



今までの文學は腹の膨れた人間の作つた文學だ。たまに空腹な人間が作つたものでも、無理に腹の膨れてゐるやうな態度をして作つたものに過ぎぬ。今は腹の空いてゐる人間が人間を見た新しい文學を要求する。それは單に食物を求める悲痛な叫ばかりではない。

○  
思想が實行の世界に移される時には、必ず色々の障害のために拒否され粗野にされる。だから、これを實行でない藝術境に放射するのだ。

○  
すべての文化——藝術でも、宗教でも、道德でも、科學でも、

それは皆人間としての本質的なものだ。決して民族反争や階級闘争の道具でも手段でもない。

○  
生きることは求めることだ。求めることは戦であり苦痛である。人間には必ず何か缺陷があるから、随つて欲求がある。精舎に禁欲生活を送る人でも、その人は更に悠久の彼岸に輝く理想境を望んで、天國を想ひ淨土を慕つてゐる。知足といひ禁欲といふのも、畢竟は求めることの一つの變態過程に過ぎない。

○  
生きて行く行路に意味があるのだ。人生のどんな努力

も、結局は「死」を購ふ代價である。

高山樗牛

名は林次郎、  
山形縣の人、  
文藝評論家、  
文學博士、明  
治三十五年  
歿、年三十二

六 月夜の美感

高山樗牛

月光の色相が吾人の心に惹起す感情は、その内容に於てこそ沈鬱悲哀なれ、その形式に於ては不定にして、それが沈鬱悲哀の對境については、何等明確なる意識あるなし。たとへ何となく思ひ沈み、たとへ何となくうら悲しきのみ。譬へば、野も山も共に月の一色に塗抹せらるゝが如く、我が心にも亦一種悲哀の調子の響き渡るを覺ゆるなり。若し人の心に快濶と沈鬱との兩面ありとせば、沈鬱の一面は此の悲哀の響に共鳴して、優しき、悲しき、哀れ深き、その他これに類せ

月見れば  
月見ればち  
に物こそ悲し  
けれわが身ひ  
とつ秋にあ  
られど(大江  
千里、古今集)

る諸の情緒に開發の機會を與ふ。「月見ればち」に物こそ悲しけれ」とは、這般の心情を歌ひたるものなるべし。されど、かくして起されたる感情は、初の中こそ定かならざれ、それが開發するに隨ひて、終には一箇の具象的形式を得ざれば已まざるべし。而してこの定かならざる感情に具象的形式を與ふるものは即ち聯想なり。

聯想にも種類あり。觀る人の性格、閱歷、境遇によりて固より一様ならざるべきも、何人の念頭にも先づ浮ぶべきは、自然と人生との對比なるべし。この世にはあるまじき月の光の清らかなる、蒼茫たる天空の心ゆくばかり美しく且限りなき、山川の依稀として無言の靜寂を保てる、平和のお

もかけ、悠久のしるし、何れか現世の好對比にあらざるべき。始なく終なき自然の美しき大觀に面すれば、人生の事業のいかにあはれにまた見すばらしく見ゆべきぞ。名利得失成敗生死、あはれ葉末の露にも較ぶべき五十年の短生命を擧げて、この煙火の巷に齷齪し悲喜することの寧ろ滑稽にも見ゆべきなり。此の如きは月夜の感慨中最も普通に見る所にして、また吾人の道徳的感情の上にも最大



江畔の句  
唐の張若虚の  
春江花月夜と  
題する長詩中  
の句

李太白  
名は白、唐の  
大詩人(701-  
762)

の影響を及ぼすものなり。自然と人生の對比について最も著しき聯想は、過去の追想若しくは遠人の思慕なるべし。  
江畔何人初見月、江月何年初照入。  
人生代々無窮已、江月年年望相似。  
こは何人も知れる張若虚が詩中の句にあらずや。天地の悠久に比して人生の須臾なるを歎ぜるが中に、過去世の追憶をも交へて、感慨のうた、永きを覺ゆ。殊に李太白が有名なる「把酒問月」の詩の如きは、最も痛切にこの感慨を現せりと謂ふべし。

青天有月來幾時、我今停杯一問之。  
人攀明月不可得、月行却與人相隨。  
(中略)



國破れて  
國破山河在、  
城春草木深、  
感時花濺  
淚、恨別鳥驚  
心、烽火連  
三月、家書抵  
萬金、白頭搔  
更短、渾欲  
不勝簪（杜  
甫、春望）

今人、不見古時月、  
今月、曾經照古人、  
古人、今人若流水、  
共看明月皆如此、  
唯願當歌對酒時、  
月光長照金樽裏、  
我が眺むる月は昔の人にも眺められたる月なりとの意識は、啻に過去世の觀念を實にして同情の強さを増す力あるのみならず、月そのものに對しても亦一種の親しき他ならぬ感情を覺ゆべし。されば、月を介して我は直ちに古人の心情を感得する想あるなり。「國破れて山河あり。」といふとも、而も天上の明月の長へに渝らざるに較べなば、山河もなほ桑滄の變あるを免れじ。されば、人生古今の盛衰を瞰下して、而も自らは一分の隆替をも感ぜざる月が、過去世の追

憶に際して最も有力なる媒介者たるは極めて自然のことなるべく、月によりて遠人を懷慕する情も同一の起原を有すべし。

過去世の追憶、遠人の思慕、此等は月夜の聯想として、恐らくは何人も覺えあることならん。この聯想は精神全體の沈鬱悲哀なる後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふる力あり。諸の詠歎はこの聯想の絲を辿りて、一種の幽渺なる安慰を吾人に與ふべし。（樗牛全集）

七月を眺めて

室生犀星

夜中に目を覺して

室生犀星  
名は照道、金澤市の人、明治二十二年生、文學者

庭に下りると 月が私の家の  
その眞上に坐つてゐる  
あるだけの光が注がれてゐる  
地は光に打たれて濕つてゐる  
今まで靜に眠つてゐた自分の家  
私が開いた雨戸の音は  
夜の葉の上を渡り  
月の中心にまで届いて行くやうだ  
かしこにもまた何者かがゐて  
見下してゐるやうな微妙さが来る

その明るさは未來の心を開く  
その美しい光の團欒  
盡きない光の泉  
絶えず人々の心に入込み  
永い生涯のつゞきを考へさせる  
光の烈しさ新しさ  
その力に今宵も私は抱かれて  
眠の中も起されて  
底に湛へられた烈しさに追はれて

靜に庭を歩いてゐる

### 八 忠義の二字

古谷久綱

明治四十二年十月、伊藤公の滿洲に向つて出發せらるゝ十日乃至二週間前のことなり。一夕、令息文吉氏東京より大磯に來り、雙親及び記者と滄浪閣に晚餐を共にす。食後、公爵夫人は別室に退かれ、文吉氏と記者は尙食卓に留りて、各般の問題に關する公の清談を謹聽せり。談進みて文吉氏の前途のことに及ぶや、公は莊重なる言語を以て文吉氏を戒めて曰く、

爾の勉學中は、予は故らに教訓がましきことを口にせ

古谷久綱 愛媛縣の人、前宮内省式部官、衆議院議員、大正八年四月十六日、年四十六歳、死す。

伊藤公 名は博文、山口縣の人、明治の功臣、公、明治十九年、年六十九歳、死す。

文吉 伊藤博文の息、明治十八年生、男爵、農商務書記官、滄浪閣。

公爵夫人 名は梅子、山口縣の人、大正十三年、年七十七歳、死す。

日本政記 頼山陽の著



伊藤博文

ざりしが、既に大學を卒業し、一個の男子として社會に立たんとすることなれば、今日予が言はんと欲する所を傾聴し、且之を記憶せよ。往事を追懷すれば夢の如しといへども、五十年來予の行動を一貫せる主義、方針は忠義の二字なり。予が幼時にいかに日本政記を愛讀したるかは、爾も蓋し之を聞知せるならん。日本國は金甌無缺の皇室を中心として政治を施すにあらざれば、到底國民の一致を保ち國運の振張を圖ることを得ず。隨つて忠義の二字を心に體す

る者にあらざれば、眞に國家に貢獻するを得ず。予が子孫にして、若し忠義の二字を忘るゝものあらば、子孫にして子孫にあらず。榮枯盛衰は世の常なり。予が子孫たる者、時勢の變遷によりていかに零落すとも、予は之を憾みとせず。然れども、忠義の二字を忘るゝに至りては、予の名節を汚し、その五十年來の苦心を水泡に歸せしむるものなれば、斷じて之を許すを得ず。

と。是より公は古今の實例を引證し、諄々として忠義の日本國民たるに最も必要なる資格たるを説明せられ、遂に深更に及べり。公寢室に退かれたる後、記者は文吉氏に謂つて曰く、嚴父公今夜の訓戒は、君須らく之を筆にし、永く子孫

に傳へ、世々父公の志を繼がしめざるべからず。」と。文吉氏答へて曰く、予も亦然せんと思へり。」と。然り而して、公當夜の言、今や重要な遺言の一となれり。嗚呼。(藤公餘影)

### 九 ハルビンの朝嵐

使命は重し身は輕し  
重き使命に輕き身を  
捧げて國に報いんと  
雄々しなつかし伊藤公  
たゞ一心に國のため

東洋平和の爲とこそ  
老を忘れて老の身を  
胡沙吹く風の滿洲へ

滿洲の野は霜冴えて

ハルビン驛の朝まだき

露國藏相と會見の

使命果せし折しもや

不慮の傷手にあなむざん  
眠るが如く息絶えぬ

「おろか者よ」とあはれみの  
たゞ一言を名残にて

あゝハルビンの朝あらし

恨は長ししかはあれ

公の勳はとこしへに

平和の塔の礎と

一〇 噫伊藤公

德富蘇峰

我が功名赫々たる伊藤公は、明治四十二年十一月四日國  
葬式終結以後、全く歴史的人物となるべきなり。故に現在

德富蘇峰  
名は猪一郎、  
熊本縣の人、  
文久三年生、  
國民新聞社  
長、貴族院議  
員

の經世家として吾人が敬意を表するは、唯この時を然りと  
なすなり。吾人豈に一言なくして已むを得んや。

然りと雖も、天下の伊藤公を頌するもの既に至れり盡せ  
り。吾人は一切の字書より最も剴切の感觸を與ふべき文  
字を援き來らんとするも、却つてその蛇足たるを虞れざる  
を得ず。何となれば、伊藤公の勲業、功德について、言ふべき  
ことまた言はんと欲することは、殆ど言盡して餘蘊なけれ  
ばなり。

吾人が平生伊藤公の特質として敬服したる主なる一は、  
その國體の大本を根據として、日新の趨勢に順應せんとし  
たるにあり。公は實に皇室中心主義の信者にして、またこ

道德文章  
敘藝倫精  
忠大節感  
明神、如今  
廟廊棟梁  
器、多是松  
門受教人  
博文

の主義が克く憲政の精神と併立し得らるゝことを信じた  
る一人なりき。されば、保守黨より見れば聊か危険なる急  
進分子を交へ

道德文章叙藝倫精忠大節  
感明神也今廟廊棟梁器多  
是松門受教人

竹文

伊藤の觀あり  
しも、急進黨よ  
り見れば却つ  
て幾分の保守  
的分子を剩し

たるの嫌あるを免れず。即ちこの中間が公の頂天立地占  
領したる乾坤たりしなり。而してこれ生前に多少の反對  
者ありしに拘らず、死後に於て殆ど總べての人より哀悼軫

惜せられる、所以ならずんばならず。

これと同時に、吾人が最も敬服したるの一は、その眼界の大局に互りたるにありき。概言すれば、世人が長といひ薩といひ藩閥といひ非藩閥といふ場合には、その心恆に國家的に存し、世人が漸く國家の大局に着眼する場合には、その眼孔は更に國際政局の上にあるにありき。これ公が單に日本に於ける第一流の政治家たるのみならず、また世界的政治家たるを得たる所以ならずんばならず。

更に吾人をして欽仰せしむる一は、その所謂國家道樂これなり。公や朝に立つも君國のためにし、野に在るも君國のためにす。その官職地位の如きは、必ずしも公の拘泥す

る所にあらず。その心はたゞ如何にしてその先輩等とともに創始したる維新の大業をして、その圓滿なる完結を告げしむべきかに存したりき。極言すれば、公は國家あるを知りて身あるを知らざりしなり。これ維新志士に於ては孰れも皆是なりと雖も、その半世紀以後、富貴榮華を享受したる時代にまでその精神を持續して毫も渝る所なかりしに至りては、誰かまた公の上に出づるものあらんや。吾人は公の半面に於て實に維新志士の典型を見たりしなり。たゞ公が福運の人たりしことは事實これを證して餘りあり。その卑賤より起りて、何等の蹉跌なく人臣の極位に達したるが如きは言ふに及ばず、その失敗さへも時として

木戸  
名は孝允

西郷  
名は隆盛  
大久保  
名は利通

は幸福を齎し來りたること一再ならず。即ちその最後の如きは、最上の不幸、最大の慘禍、最深の悲哀なるに拘らず、若し傍觀者としてこれを見んか、孰れか敢て此の如き幸福なる死所を得たるものぞ。人生皆死あり、たゞ死所を得るを難しとなす。公の先輩木戸公は如何。彼は四十代の働き盛りにして、西南戰爭中京都に客死したり。公病中嚙語して曰く、西郷もう大抵にして止めんか。と。公の苦衷豈に憐むべきにあらずや。大久保公は如何。西南の亂漸く平ぎ、今後十年を期して内政を整頓せんとするの最初に、兇刃のために斃れたり。固より伊藤公の如き後繼者ありしを以て、思ひ残す所少かりしならんと推するを得べきも、その志

業の中途にして逝きたるは、長く英雄をして涙襟に満たしむるものなくんばあらず。

我が伊藤公や然らず。その國家に貢獻する所に於て、今や殆ど一生一代の總勘定を了りたりき。韓國統監は公の最後の任務なりしも、それすら既に段落を告げたり。固より一日の生存は一日の奉公たり、一日の奉公は一日の國益たれば、何人も公の長壽を祈るの外なしと雖も、而も若し世にその死所を得たる人ありとせば、公の如きは實にその第一たるを争ふべからず。世界圖視の眞中に於て、日露清交又の地點に於て、平和と好意の使命を齎したる途上に於て、而して生涯の筋書は殆ど總べて演じ盡したる後に於て、突



然その幕の落つるに際す。若し公の生や赫々たらば、その死や更に赫々たりと謂はざるを得ず。吾人は公の最後にすらも福神の附纏うたるを見て、公の福運の轉た隆なるを驚嘆せずんばあらざるなり。

以上は、唯今日に於て、吾人が最後の敬意を表するため、清白なる良心を以て、この際に言ひ得べしと信じたる要點なり。これ以上の言は、いかに敬意を表すればとて、或は諛辭に近からん。而してこれ以外の言は、歴史家として寧ろ吾人の情熱の平調に復したる後を俟つて、徐ろに參究するも未だ晚しとせざるべし。(蘇峰文選)

坪内逍遙

名は雄藏、名古屋市の人、安政六年生、文學者、文學博士

近松

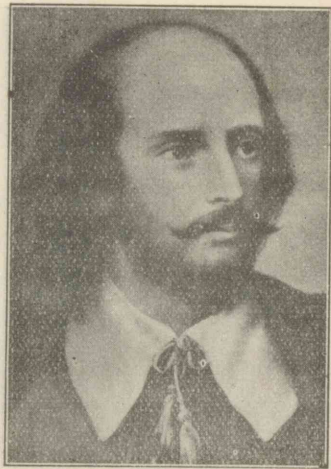
通稱門左衛門、本名杉森信盛、長門國の人、徳川中世の淨瑠璃作者、享保九年(一三八四)歿、年七十二

一一 近松とシェークスピア 坪内逍遙

予嘗て近松とシェークスピアとをその位置時代境遇閱歴等の上より比べて、十餘條の相似點を得たり。曰く、その時代の共に文藝の復興期たりし點相似たり。曰く、傳記の不明なる點相似たり。曰く、その世に出でしまでの閱歴相似たり。曰く、演劇未成熟時代に出でて大成者たる點相似たり。曰く、當時行はれつゝありし諸先驅の長所一切を攝取せし點相似たり。曰く、翻案または改作・添作若しくは合作を嫌はざりし點相似たり。曰く、劇の原始時代に出でて、爲に益し爲に損したる點相似たり。曰く、諸座に關係して諸種の脚本に變化自在の技を揮ひし點相似たり。曰く、



古今内外を問はず、作家の賦性には本來二大區別あるかと思ふ。先づ作するに當りて想と筆と同時に働く作家あり。脚色も人物も對話も詞藻も湧くが如くにして咄嗟の間に成る。自らもその如何にして然るかを知らざるもの如し。時としては筆のかた想よりも先に働かしにやと疑はるゝ場合なきにあらず。これを半無意識にして作すと謂ふ。譬へて言へば、骨と肉と皮膚と服飾とが一時に立地に製せらるゝに似たり。シエークスピヤの如きはその最も大いなる代表者なり。然るに、



ヤビスグーエシ

イブセン  
ノルウェーの  
作家・詩人  
(1828-1906)



イブセンの如きをその著しき適例とす。イブセンの如きをその著しき適例とす。イブセンの如きをその著しき適例とす。イブセンの如きをその著しき適例とす。

これとは幾ど反對に、作の骨組の十分に整ひたる後までも、肉は尙備はらず、皮膚の未だ布き及ばざる部分あり、服飾は勿論なり。即ちその想の悉く具體化せらるゝまでには、一年、時としては二三年を要すること、稀ならず。此の如きは十九世紀以來の名家に多し。徹頭徹尾自ら意識したる著作振なり。イブセンの如きをその著しき適例とす。イブセンの如きをその著しき適例とす。イブセンの如きをその著しき適例とす。

半無意識の作家は必ずの如くに健筆なり、一氣呵成なり。千篇立地に成るの概あり。随つて出来不出来あり、杜撰、燕雜、支離、無稽の失あり、翻案、改作に過ぎざる作あり、時として

は更に一段名譽ならざる評判を蒙る場合すら尠しとせず、脚色にも前後辻褃の合はぬことあり、不自然を極めたる性格あり、不條理千萬の事件あり、片腹痛き悪文あり、鄙陋至極の文句あり、駄洒落あり、無くては聊か差支へぬ筋や人物や詞句が幾らもあり。その傑作にすらもムダやソツやアラやキズのなきことはなし。脚本は一小宇宙にして有機體に比すべきものなりなどと評することもあれど、この種の作家のは必ずしも然らず。その最大代表者たるシェークスピヤのすらが大分のムダ附にて、現に一幕幾場かを切取つてしまひても、作の生命が絶ゆるでもなし。「ハムレット」や「オセロ」すらもさうなり。恣に枝を繁らせたる老銀杏樹

Othello

Hamlet

孟嘗君  
 本名は田文、  
 支那周代齊の  
 相、食客三千  
 人を養つてゐ  
 た(一冊279)

の如く、然らざれば、來る者は拒まず去る者は追はざる孟嘗君式の家庭組織などに比すべし。之に對して、全意識に成れる近代の名作は、截然たる別天地なり。一例へば、イブセンの作などには幾ど秋毫もムダといふものなし。目立たぬやうに手を入れたる數寄屋好みの樹木などに比すべし。ふと見れば自然の儘の如くなれど、よくよく見れば、一齣一段はいふに及ばず、一句一字の末までも、作家の周到明確なる自意識の奥書を経たるものにあらざるはなし。手抜け不用意、勘違へ見落しなどといふ意味の瑕疵は絶えてあらずといふも可なり。隅から隅までキチリンシヤンと行届きて、些のスキもなく些のタルミ

もなく些のアソビもなきをこの類の作の特質とす。  
 ゆとりに富める前類の作と、引締りたる後類の作と、その  
 佳なるものに至りては必ずしも優劣なし。たゞ前者の傑  
 出せるものを讀む時は、その形式や内容に不自然の箇所夥  
 しきに係らず、案外にも心を山野河海の間に遊ばせつゝあ  
 るが如くに感じ、後者の秀でたるを讀みては、その話もその  
 事もその人物も如何にも實際らしく感じながら、不思議に  
 も狭き一室に靜坐して人生の疑問を沈思せしめらるゝが  
 如くに感ず。後者は人生を觀照して自我を深うするに宜  
 しく、前者は忘我し遊神して天地と同化するに宜し。  
 この作癖の相違は主として作家が稟賦の然らしむる所

たるに外ならずと雖も、年毎に自意識の強烈ならんとする  
 現代に於ては、前者に屬せしむべき大いなる作家を看出す  
 ことは次第に稀有になり行くべし。シェークスピアに比  
 すべき近松は、この點より觀て趣味深き研究の對象なりと  
 いふべきなり。〔近松傑作全集の序論に據る〕

一二 遍路行願

荻原井泉水

私は今小豆島を巡禮してゐる。この島は小豆島といふ  
 より、島四國といふ方が世間によく知られてゐるやうに、  
 そこには四國八十八箇所になぞらへた弘法大師の靈場が  
 あつて、それを參拜する巡禮を遍路といふ。

荻原井泉水  
 名は藤吉、東  
 京市の人、明  
 治十七年生、  
 俳人

亡き妻の供養のために——これも私が遍路行願を企てた動機の一つには相違ないが、しかし、それだけのためにわざわざこの島に來たのではない。

妻が急のことで歿してから、私は妻の短生涯について、彼を愛したよりも、いかに多く彼を苦しめたかといふことを省みさせられた。その後、やがて私の母もまた歿した。私は母の恩愛に對して何一つ酬いることもせず、世間並の安心さへ得させないで逝かせたことを悔いた。これは皆私の主我主義のためである。人の命の無常を痛感しないで、自分の心の浅い計らひに従はせようとして、妻をも母をもその犠牲にしてしまつたのである。私は妻や母の死を悲

しむといふよりも、取返しのかね罪を犯したといふ自責の念に苦しめられ通した。私は頭を剃つて佛門に入つたなら、この苦みから免れられようかとも思つた。しかし、それは私の機縁が熟しないので許されなかつた。そこで、せめて、白衣を着、頭陀袋を下げ、佛を尋ねて旅する遍路となつて、精進・懺悔の行願をしよう、さうしたなら、幾分か私の心も軽くならう。これが私の遍路としてこの島へ來た他の一つの動機である。しかし、それだけのためではない。私は自分の罪は救はれ難いと思つてゐる。けれども、自分がかうして生かされてゐるといふこの事實がそのまま、大きな佛の慈悲によつて、私が許されてゐる證據ではある

まいか。それならば、私は自分の大きな罪について自分を責めるよりも、それほどの罪をも許してくれる一層洪大無邊な佛の愛に向つて感謝すべきではないか。その佛の愛は、枯れきつた冬木から新しい香の芽を吹かせる太陽の光その物ではあるまいか。私は自分のかたくなな心を以て、自分からその魂に暗い影を作つてゐるのではないか。ああ、自分の心の暗い室を出よう、春の光の中に出よう。小豆島の輝く海と空、麥の中の道、彼處へ行つて思ふ存分に光明の中に浸らう。心に光明を禮讚しながら、口に眞言を唱へながら、身を運んで隨所の佛を詣拜しよう。さうしたならば、心の底から自分の寂しい生命の尊さをも痛感し、同時に、

佛の悲願の有難さをも體驗することが出来よう。——これこそ私が遍路としてこの島へ來た最も主な動機である。ああ、私の求める所の佛は、必ずしも堂の中に祀られてゐる所の彫像ではない。道端に咲いてゐる蒲公英の一本、畑から簇立つてゐる麥の穂、——その美しさ、その生きる力に、若し私の心がびつたりと合ふことが出来たならば、私は恭しく合掌するだらう。以前この島に遊んだ時の佛を信ずる麥の穂の青き眞實といふ拙い作にも、私は今かうした私の心を寄託したいと思ふ。麥の穂の青さに佛を見、雲雀の聲に佛の言葉を聞きなが

ら、お、私は獨り限りなく旅を續けて歩きたい。嘗て母が病み又妻が病んでゐる時、私は殆ど旅に出る自由を持たなかつたが、妻が歿し母が歿して、全く私一人となつた時、これは又何と存分に與へられた、旅をする自由であらう。しかし、この存分に與へられた「自由の寂しき」を誰が知らう。

### 一三 女性の求める宗教

内ヶ崎 作三郎

男性は闘士として、探検者として、また建設者もしくは創造者として、人類の進化に參與して來た。そして、女性は刺戟者、家庭製造者及び慰安者として、男性の足りないところを補うて來た。男性はどこまでも奮闘的である。先人未

内ヶ崎作三郎  
宮城縣の人、  
明治十年生、  
早稻田大學教  
授、衆議院議  
員

踏の地や古人未發の眞理に第一步を入れようとする。或は家屋を築造し、都市を建設し、國家を創創する。しかし、どんな男性も、善につけ悪につけ、女性と何等の交渉なしに行動することは出來ぬ。母の愛に感激することもあれば、妻の愛に刺戟されることもあれば、また娘の愛に發奮することもある。だから、女性の第一の特質は、男性に靈感を與へることである。男性は家屋を造るが、家庭を作るのは女性の特質である。家屋は女性の手に觸れて始めて家庭となるのである。また慰安者としての女性の力がどんなに偉大であるかは、歴史の證明するところである。戰場に於て、病室に於て、その他に於て、失望し、落膽し、喪心してゐる男性



を劬り、助け、勵ますのは女性である。男性の特質を發揮するのには、力、勇氣、名譽心、仁俠もしくは慇懃の諸徳が必要である。力とは腕力だけでなく、精神力、智力、徳力をも意味するのである。女性の特質を發揮するのに、まづ第一に必要な徳は美である。容貌や體格や裝飾の美も勿論考慮の中に入れなければならぬが、美は必ずしも虚榮でもなく、みせびらかしてもなく、そして、眞の美は容貌、風采にだけ存するものでないから、精神の美、品性の美、心の美、靈魂の美は、肉體の美にも譲らず人を引きつける力を有してゐる。女性の第二の徳は忍耐である。人類の歴史があつて以

來、女性は忍耐しないではゐられなかつた。夫は狩獵に出で、子は戰場に去つて、共にその歸期を知らなかつた。この間、妻として、母として、女性は忍耐して彼等の歸來を待つた。随つて女性は男性よりも遙に困難に耐へ缺乏に處する道を心得てゐる。

女性の第三の徳は忠實である。これは勿論男性に於ても重んずべき徳であるが、女性に於ては特殊の價值がある。それは、この美徳があると、血統の純潔と家庭の和樂とが維持されるからである。

女性の第四の徳は温順である。ギリシャの神話に、風の神が大浪を起してゐた時、Venus ヴィーナスの美神が顯れたとこ

ヴィーナス  
美しい女神

柔よく  
柔能制剛、弱  
能制強(三  
略)

ろ、天地は清朗となつて、風も浪も鎮まつたといふ物語がある。これが婦人の最も美しい特質の發露である。柔よく剛を制す」と古人もいつた。弱くて強いのは女性の長所である。

女性の特質が果して右に述べたやうであるなら、その求める宗教は、この特質の發揮を助長するものでなければならぬ。

女性の重要な職分を刺戟者・靈感者即ちインスピレーター

であるとする、女性自ら靈感の源泉を枯渴させないやうに務めねばならぬ。そのためには靈感を與へる對象が必要となる。これを宗教的にいふと、神・佛・天道といふやうな

ものである。しかも、その實在は死んでゐるものでなくて、生きてゐる眞理の泉でなければならぬ。神學的の神でなく、儀式の目的たる佛でなく、古典の中の天や道でなくて、女性の心の中に不斷に活動する不思議な力でなければならぬ。またこの對象だけで不十分だとすると、この眞理を體現する人格者を儀表とすることが必要である。そして、この大生命・大人格と神會默通することが必要である。冥想・靜思・默禱・坐禪もよい。情が迫つたら、人のゐない室で聲を立てて祈るのもよい。またはその人格者の言行を味讀して、これを日常生活に體驗することを心掛けるのもよい。

女性が家庭の製造者・慰安者としての天職を發揮するた

めには、その宗教的對象物の神髓は愛でなければならぬことを悟るべきである。即ち神は愛である、否、愛そのものが神であると理解すべきである。家庭の經營者としてその中心の位置に立つ女性は、神の事業を助けるのである。或は野戦病院に於て、或は病室に於て、或は救護所に於て、負傷のために、病氣のために、呻吟してゐる多くの人々を看護する女性は、神の事業の參與者である。幾分でもこの信仰があると、女性の生活には大きい意味があることになる。

これまでの神はあまりに神學に囚へられた生命のないものであつた。そのため宗教的信仰は虚偽ではないかとまで疑はれた。しかし、所謂神は宇宙に遍満する生命で、人

は自己の心を通してこれと關係を有するのである。要するに、神は生命の源泉であるから、生命の賦與者、傳達者である女性は、神とともに生きてゐるといふ信念の上に立つべきである。神を雲の上の大男と見れば、そこに迷信も生ずるが、しかし、見えず、語らず、しかも天地に普き靈氣に接して、何ともいひ知らぬ崇高の感じを味ふ時は、神に觸れたのである。奇々怪々の神でなくて、全身全靈を包容し、攝取し、指導するくしき力が自分の心に湧くことを感ずるのである。女性の求める宗教は儀式を要する、單純清楚で神秘的な儀式を要する、美の要素を多量に有する儀式を要する。特に日本の女性は感情が細かであるから、感情を満足させる

儀式を要する。若し理性の勝れた女性ならば、黙禱や靜思で満足しよう。しかし、多くの婦人は音樂を要し、繪畫や彫刻さへも要するであらう。

女性の忍耐や忠實や溫順の美質を發揮させるためには、眞面目な教團とか教會とかの組織が必要になる。それは一時的の感激や興奮でなくて、恆久的の感情に基づかなければならぬ。このためには團體が必要になる。宗教に團體が必要なのは、教育に學校が必要なと同じである。

#### 一四 思想と言語

大橋 房子

生れながらの聾者の心を思ふ。そして、その世界の靜け

大橋房子  
東京市の人、  
明治三十年  
生、文學者

さを思ふ。耳のないものの世界には音が無い。少くとも耳のあるものの世界に鳴つてゐる音は、耳のあるものに感じられるのと同じ響を以て、靜寂そのもののやうな聾者の世界を亂すことが出来ない。

耳のないものの世界は、同時に言語のないものの世界である。言語を知らない生れながらの聾者は、どんな形に於て思索するだらうかと、私は訝らずにはゐられない。私が思索してゐる時、私の頭のどこがどのやうに働いてゐるのか、私は自分ながらどうしてもそれを自分自身の中から摑み出すことが出来ない。また思索とは一體どんなことであるのか、それも私にははつきり解らない。しかし、思索が

一つの形を取つた時——少くともそれが一つの思想としてはつきり私の前に現れて來た時、外的に見ると、それは言語の連鎖以外の何物でもない。内容即表現論の立場からいふと、言語を除いた思想といふものは存在することが出來ないことになる。

思索の心理的過程は姑く措く。若し表現の方便を缺いた思想があり得ないとすると、また若し思想が言語といふ媒介物の奥に存在する別種の靈物でないとすると、その言語を全然知らない生れながらの聾者は、絶対に思索することを許されてゐないのだらうか。

或年の雛祭の日、私は物語じみた緋毛氈の裾の方に坐つ

て、三歳になる耳の悪い姪の遊相手になつてゐた。どうせ聞えないとは知つてゐても、私はその子に向つて發しないではゐられない言語を、身振によつて誇張しながら、その子の澄んだ瞳に私の瞳を合せて、頬笑み合つてゐた間はまたよかつたが、表情の話や遊に飽きたその小さい姪が、すぐ傍で彼女をじつと見守つてゐる私の存在はまるで忘れてしまつたかのやうに、小さな手先を器用に働かして、繰返し繰返し玩具や道具を並べ換へてゐる後姿の寂しさに氣づいた時、私はたまらなくなつて泣出してしまつた。惱ましい噪音の包圍から解脱し得てゐるものの心境はどんなに静かだらう、穩かだらう、そして清澄だらう。その無言境を羨

む心が私の内部にないではなかつたが、たとひそれが生存の苦惱をより深めるものであるにしても、彼女がこの世に生きる凡べてのものの當然持つべき世界の一つを全然知らずに過ぎなければならぬといふことは、その小さい姪を熱愛してゐる叔母の身にとつては、堪へがたい苦みであるに相違ない。私は小さい彼女のため、しかも彼女自身は全然關はり知らない悲みのため、遊に耽つてゐる無心な彼女の背後で、切ない歎歎の聲を忍ばねばならなかつた。

この不具の姪ゆゑに、またこの小さい姪に對する譬へやうのない愛ゆるゑに、私は、言語と思想、思想と表現といつたやうな問題について、眞劍に考へないではゐられなくなつた。

ヘレン、ケラ

アメリカ合衆國の女流思想家  
(1890—)

Helen Keller

生れながらに聽覺を奪はれてゐるものは、言語を知らない。よし言語に對するその文字と意味は何等かの方法で教へることが出来るにしても、またあのヘレン、ケラーのやうに、耳と口と眼を併せ缺いてゐる不具者でありながら、讀書發聲の自由を獲得することが出来るとしても、耳のないものの解する言語は、耳のあるものの驅使する言語に比して、随分相違するやうに思はれる。勿論心理學上、哲學上の認識問題にまで立入つていふと、健全な人々の間にさへ完全に同一な理解は成立しないことになるだらうが、耳のないものの一群と耳のあるものの一群との間に存する文字の理解の隔たりは、耳のあるものの相互の間に生ずるそれとは、比

べるべくもないほど大きなもののやうに思はれる。文字だけについても既にこれほどの差異がある。しかも、言語は文字だけによつて完全に表現することが出来るものでない。眼を通して頭に入る文字の意味は、口から耳へと訴へる言語の響と呼應して、始めて全的に理解されるものである。喉の振へ、舌先の動き、唇の開閉などの與へる微妙な氣持を抜きにして文字に接するものが、言語に對して一種特異な感じを抱くのは當然なことだらう。

が、これはたとひ部分的にもせよ言語を解することの出来るものことである。こゝでまた私は全く言語を使用することの出来ない小さい姪を思ひ起して、彼女は眞に思

索といふことを知らないだらうかと繰返して訝つた。人間生活の大部分を占めてゐる言語を通しての意志や感情の表現の代りに、小さい彼女は驚くべき豊かな力強い表現法として身振を持つてゐる。私にはどうしてもそれが單なる喜怒哀樂の反射的表現ばかりだとは思へない。彼女は暗示に應じて、過去に得た印象を喚起することを知つてゐる。彼女には髓に記憶があり、想像があり、そして推理が働いてゐる。彼女は彼女なりに、言語といふ媒介物を用ひることなしに、それだけ自由に思索してゐるのではあるまいか。彼女には彼女なりの思想があるのであるまいか。表現の手段を缺き、そして傳達の方法を缺いてゐる思想

は、思想として客觀的に存在しないといはなければならぬ  
いかも知れない。しかし、思索するもの自身の心には、それ  
は最も眞實で確實な存在であるに相違ない。殊に耳のな  
いものの思想は、それが唯一の表現機關であるかのやうに  
思ひ做されてゐる言語に慣れて却つてそれに囚はれ過ぎ  
てゐる耳のあるものの思想より、遂に純粹で煎じつめられ  
たものであるやうに思はれる。

不幸な姪の存在は、私に、言語の價値が絶對的なものでな  
いといふことをはつきりと悟らせてくれ、また思想は狭い  
言語の圏外に超越してゐる神祕な存在であるといふこと  
を教へてくれた。同時に、彼女の全く自由な自發的な表現

法は、思想の流露が決して一方法に限られてゐないといふ  
ことを證據立ててくれた。そして、私は、今まで理會するこ  
とが出来てゐると思つて、しかもその實よく知つてゐなか  
つたところの、音の言語、音の思想といつたやうなもの、存  
在を、はつきりと見極めることが出来たやうな氣がする。

一五 翻譯

日下部重太郎

安倍仲麿が明州で唐人と別れる時に、即興に詠んだ三笠  
山の歌について、大日本史に、「因寫以漢語示之。衆皆感嘆」と記  
してある。仲麿ほどの詩才であるから、これを詩に譯して  
見せたら、唐人の感嘆は一層深かつたであらうと思はれる。

日下部重太郎  
岐阜縣の人、  
明治九年生、  
國語研究家、  
東京高等師範  
學校講師



白氏文集の「燕子樓」の第一の詩、

滿窓明月滿簾霜 被冷燈殘拂臥牀

燕子樓中霜月夜 秋來唯爲一人長

を、唐物語には、

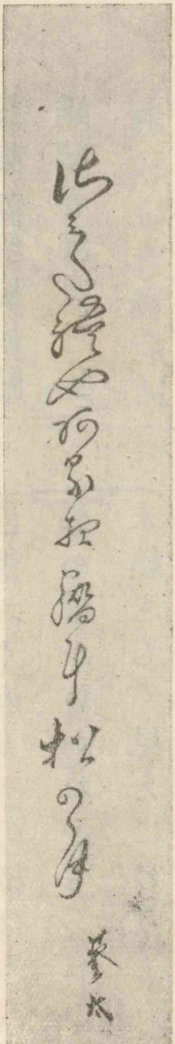
もろともに見しに光やまさりけん

いまはさびしき秋の夜の月

と譯してある。元來絶句を短歌に譯する時は、詞が不足して、十分に原作の意を寫すことは極めて困難である。これに反して、短歌や俳句を絶句に譯する時は、原作の意を寫すのに詞が十分である。俳諧名家傳に據ると、蓼太の門人が、五月雨や或夜ひそかに松の月

蓼太  
大島氏、俳人、  
天明七年(一四四  
七)歿、年七十

さみだれや  
ある夜竊に  
松の月  
蓼太



蓼太筆贖

の意を漢譯して、或清國人に見せたところ、その人は大きに

感心して、「因賦一絶、寫其意、傲輦之誚、所不辭也。」と斷つて、

長夏草堂寂 連宵聽雨眠 何時懸月色

松影落庭前

と譯したさうである。韻文を巧に他國語の韻文に譯することは、翻譯の中で最も困難であらう。

一六 孝女白菊 (節錄)

阿蘇山下荒村晚  
夕陽欲沈鳥爭返  
無邊落木如雨繁  
隔水何處鐘聲遠

此時少女待阿爺  
出門少立空悲嗟  
鬢髮如雲風中亂  
嬌顏春淺美於花

阿爺一朝衝寒起

阿蘇の山里あきふけて  
眺さびしきゆふまぐれ  
いづこの寺の鐘ならん  
諸行無常と告げわたる  
折しもひとり門に出で  
父を待つなる少女あり  
としは十四の春あさく  
色香ふくめるその様は  
梅か櫻かわかねども  
末頼もしく見えにけり

蘆花風外渡野水  
曉月影昏野廟西  
遙々去入深山裏  
不知猶爲遊獵不  
數日不歸何處留  
凄烟飛迷殘照外  
望斷楓錦柿緋秋  
向夜階前拾落葉  
纖手煮茶搖湘箒  
每聞戶響疑阿爺  
迨至深更未交睫

父は先つ日狩に出で  
今なほ音づれなしとかや  
軒に落ちくる木の葉にも  
笥の水のひゞきにも  
父やかへると疑はれ  
夜なく眠るひまもなし

闔村人定氣寂寥  
 哀雁曳聲度雲霄  
 須臾天黑秋風急  
 芭蕉葉戰雨瀟瀟  
 至此益思阿爺苦  
 靜坐不堪聽夜雨  
 綠簑紅笠爲輕裝  
 村外歷遍幾林塢  
 \* \*  
 誤入深山墜谷底  
 菓實爲食水爲醴

わきて雨降る小夜中は  
 庭の芭蕉の音しげく  
 鳴くなる蟲のこゑくに  
 いと哀れを添へにけり  
 かゝる寂しき夜半なれば  
 ひとり思にたへざらん  
 菅の小笠に杖とりて  
 出でゆくさまぞ哀れなる  
 \* \*  
 我あやまちて谷に墜ち  
 登らんすべもあらざれば

百方欲登登不得  
 起臥洞中纔護體

木の實を拾ひ水飲みて  
 長き月日を送りにき  
 或日のあした起出でて

一朝仰見山千層  
 群猿在巔倚枯藤  
 底事喚我如有意  
 攀之巉巖殆得登

峰のあたりを見上ぐれば  
 長くかゝれる藤かづら  
 上のましろのなきさけぶ  
 なくなる聲の何となく  
 心ありげに聞ゆれば  
 神のたすけと攀登り  
 始めて峰に登り得つ  
 嬉しとあたりを見渡せば

井上哲次郎  
福岡縣の人、  
安政二年生、  
文學博士  
落合直文  
號は秋の家、  
宮城縣の、  
國文學者、明  
治三十六年歿  
年四十三

武者小路實篤  
子爵武者小路  
公共の弟、東  
京市の人、明  
治十年生、文  
學者

登來群猿散無跡  
蟬聲如雨滿山背  
誰知義氣亡人間  
却存獸中寔可惜

(井上哲次郎)

さきのまじらは跡もなく  
木立のしげき山かげに  
蟬の聲のみきこゆなり  
浮世のならひとひながら  
浮世のつねといひながら  
人になさけの失せはてて  
獸に残るぞ哀れなる (落合直文)

一七 柿の枝ぶり

武者小路實篤

自分は窓の前の柿の枝ぶりを  
今更に注意して見る。

自分は柿の枝ぶりには  
常に敬意を持つてゐるものではあるが、  
今更にその生きくとして美しく  
一癖も二癖もあるのに感心する。  
その線の調子ある撥ねかへり方の面白さ。  
その線の内から力が籠つて、  
一筆々に調子がとれてゐる面白さ。  
どんな天才の筆でも、  
こんなに内から力がこもり、  
そして面白い線を出すことは  
出来まいと思はれる。

一つの線もおろそかには出てゐない。  
 皆内に力がこもつて、  
 面白い調子のもとに生れ、  
 その太さの工合も面白い。  
 その彼方に曲り此方に曲る  
 曲り方も美しい。  
 自分は今更に敬意をもつて  
 柿の枝ぶりを見る。  
 自分が畫家だつたら、  
 この枝ぶりを手本にするのだがな  
 と思つて見る。

中編

一 小野の深雪

昔、惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなた  
 に水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛りには、  
 その宮になんおはしましける。その時、右馬頭なりける人  
 を常におはしましけり。狩はねもごろにもせて、大和  
 歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻ことにお  
 もしろし。その木の下におりゐて、枝を折りてかざしにさ  
 して、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人、

惟喬親王  
 文徳天皇の皇  
 子  
 山崎  
 攝津國  
 右馬頭  
 在原業平  
 交野  
 河内國

世の中にたえて櫻のなかりせば  
春のころは長閑けからまし  
となん讀みたりける。また或  
人の歌、



在原業平

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。  
歸りて宮に入らせたまひぬ。夜更くるまで物語して、さ

散ればこそ  
いと、櫻は  
めでたけれ  
憂世になにか  
久しかるべき

小野  
山城國

て、あるじの皇子入りて大殿ごもりたまひなんとす。十一  
日の月も隠れなんとすれば、かの馬頭よめる、  
あかなくにまだきも月のかくる、か  
山の端にげて入れずもあらなん  
かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、皇子おもひの外  
に御髪おろさせたまひて、小野といふ處に住みたまひけり。  
正月に拜み奉らんとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓  
なれば、雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つ  
れづれにいと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍  
ひて、古のことなど思ひいできこえけり。さても侍ひてし  
がなと思へど、おほやけごとどもありければ、え侍はで、夕暮

に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや

雪ふみわけて君を見んとは

とてなん泣くく來にける。(伊勢物語)

### 二 古文錦繡

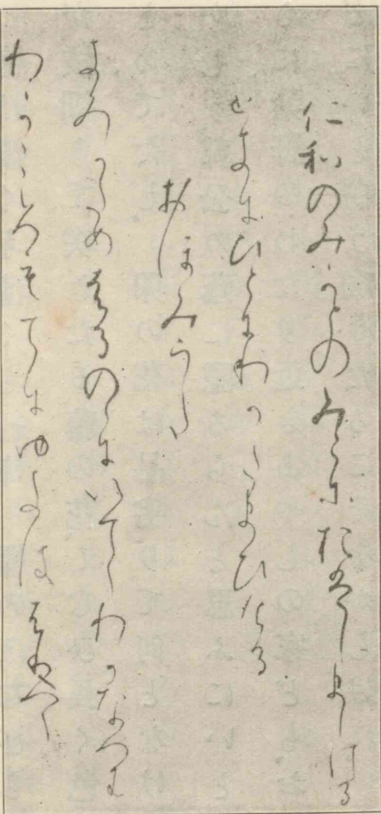
#### 一 わかれ

九日。つとめて、大湊より那波のとまりをおはんとて漕出でけり。これかれ互に國の境の中はとて、見送に來る人あまたがなかに、藤原言實まこと橘季衡長谷部行政らなん、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追來る。この人々ぞ志

九日  
承平五年(元  
正一月  
前年十二月二  
十一日土佐國  
を出發した

仁かどこの  
しにまおの  
ひるとまに  
かたときけ  
おほるまに  
おけはみう  
たほるまに  
みたるがた  
はるむわの  
ないでわの  
こつむわの  
つゆきふり

ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕離れて往く。これを見送らんと



紀貫之筆蹟

てぞ、この人どもは追來ける。かく漕行くまにまに、海のほとりにと

どまる人も遠くなりぬ、舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし、舟にもおもふことあれど、かひなし。かれど、この歌を獨言にして止みぬ。

おもひやる心は海を渡れども

ふみしなれば知らずやあらん (土佐日記)

二 木の花は

梅は濃くも薄くも紅梅。櫻のはなびら多きに、葉色濃きが、枝細うて咲きたる、藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、郭公の蔭に隠るらんと思ふにいとをかし。祭の歸さに紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などにいと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣の上に白き單かさねかづきたるやうにていとをかし。

四月の晦、五月の朔などのころほひ、橘の葉のいと濃く青

紫野  
山城國愛宕郡  
大徳寺邊の舊  
名

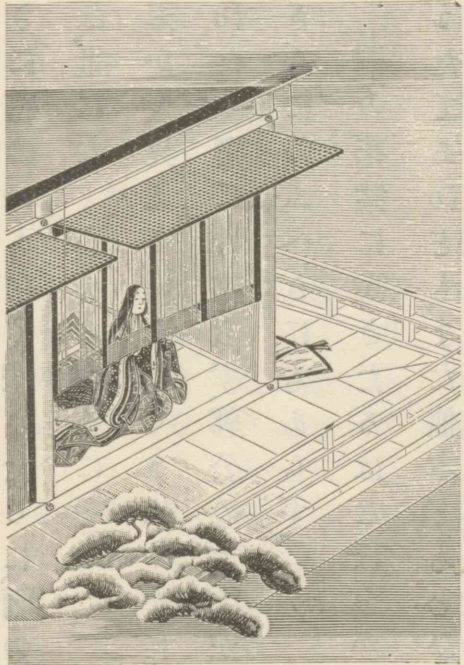
きに花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにかし。花の中より實の黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず、郭公のよすがとさへ思へばにやなほさらにいふべきにもあらず。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉の廣がりさまうたてあれども、また他木どもとひとしういふべきにあらず。もろこしにことごとくしき名つきたる鳥のこれにしも住むらん、心ことなり。まして琴につくりてさまよくなる音の出でくるなど、をかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。



木のさまぞにくげなれど、櫻つばきの花いとをかし。枯ればな  
に様ことに咲きて、必ず五月五日に逢ふもをかし。(枕草子)

三 はしたなきもの



清 少 納 言

こと人を呼ぶに、われかとしてさし出でたるもの。まして物  
取らする折はいと、  
おのづから人のうへ  
などうちいひ謗りな  
どもしたるを、をさな  
き人の聞取りて、その  
人のある前にいひ出  
でたる。あはれなる

ことなど人のいひてうち泣くに、げにあはれとは聞きなが  
ら、涙のふと出で來ぬ、いとはしたなし。泣顔つくり、けしき  
ことになせど、いとかひなし。めでたきことを聞くには、ま  
たすゝろにたゞいできにこそ出でくれ。(枕草子)

四 遺言

この姫君たちをすゑなめて泣くく、のたまひける、とし  
ごろ佛神にいみじく仕うまつりつれば、何事もさりとともと  
こそたのみ侍りつれど、かくいふがひなき死にをさへせん  
ことの悲しさ。かく知らましかば、君たちをこそわれより  
も先に失せたまひねと祈り思ふべかりけれ。おのれ死な  
ば、いかなるふるまひありさまをしたまはんずらんと思ふ

が悲しく、人わらはれになるべきこと。」といひつゞけて泣か  
せたまふ。「怪しきありさまをもしたまはば、なき世なりと  
も怨みきこえんずるぞ。」とぞ、母北の方にも泣くく、遺言し  
たまひけるかし。(天鏡)

五 藥師佛

東路の道のはてよりもなほ奥つ方に生ひいでたる人、い  
かばかりかはあやしかりけんを、いかに思ひそめけること  
にか、世の中に物語といふものあなるを、いかで見ばやと思  
ひつゞつれ、なる晝間、宵居などに、姉、繼母などやうの人  
人の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々語るを  
きくに、いとゆかしさまされど、我が思ふまゝに、そらにい

九月三日  
治安元年(六  
八)

かでおぼえ語らん。いみじく心もとなきまゝに、等身に  
藥師佛をつくりて、手洗ひなどして、ひとまにみそかに入り  
つゞ、京にとく上せたまひて、物語の多く侍るなる、あるかぎ  
り見せたまへ。」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三  
になる年のぼらんとて、九月三日門出して、今立といふ所に  
移る。年ごろ遊びなれつる所を、あらはに毀ち散して、立ち  
さわぎて、日の入りぎはの、いとすぐ霧わたりたるに、車に  
乗るとてうち見やりたれば、ひとまには参りつゞ、額をつき  
し藥師佛の立ちたまへるを見捨て奉る、悲しくて、人知れず  
打泣かれぬ。(更科日記)



瀧の白絲

山姫の瀧の白  
絲くりためて  
織るてふ布は  
夏衣かも(藤  
原長経、續後  
撰集)  
龍門の瀧  
黄河の上流に  
ある、鯉魚が  
これを上ると  
化して龍とな  
るといふ

とし、または破らんとするを、人はもとより人なれば、さまざま  
まにあつかひて遂に捕るぞかし。われはかのざと音する  
を聞けば、心しづめて水底につきて離れず。網引は上の方  
を行きぬ。ゆるに捕らるゝことなし。かはをそあじかな  
んぞいふものもあれど、深くひそまり隠るれば、そのうれひ  
も免れぬ。また俄に雨降りいでて、思ひ寄らぬあたり、また  
はつねいさゝか水の落つる岩がねなどより、瀧の白絲くり  
ためて落ちそふ勢の激しさに、心も浮立ちて、かの龍門の瀧  
ならぬことは知りながらも、あまりに心地のよさにほださ  
れて、その瀧を登るにぞ、あるは岩かどにあたりて傷くもあ  
り、辛うじて登りぬるも、雨やみぬればいと浅き瀬なり、歸ら

ん道も知らねば、深きところへ、辿り行くを、行く人などの  
見つけて捕るぞかし。かうやうのにはかなる勢にも乗ら  
ずして、かく百歳をも幾度か經にけん」と語りき。(花月草紙)

四 夢應の鯉魚

上田秋成

むかし、延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に  
巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫くところ、佛  
像・山水・花鳥を事とせず。寺務の間ある日は、湖に小船を浮  
べて、網引き、釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚をもとの江に  
放ちて、その魚の遊ぶを見ては、畫きけるほどに、年を経て細  
妙に至りけり。或時は繪に心を凝して眠をさそへば、夢の

上田秋成  
大阪の人、徳  
川末期の國學  
者、文化七年  
(一四七〇)歿、年  
七十八  
延長  
醍醐天皇の御  
代  
三井寺  
本名園城寺、  
近江國にある  
天台宗寺門派  
の總本山



て申さんは、法師こそ不思議に生きはべれ。君今酒を酌み、鮮けき繪を作らしめたまふ。暫く宴を罷めて寺に詣でさせたまへ。稀有の物語聞えまゐらせん。」とて、かの人々のあるさまを見よ。我が詞につゆ違はじ。」といふ。使怪しみながら、かの館に往きてそのよしをいひいれて窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎、家の子掃守などゐめぐりて酒を酌みゐたり。師が詞のたがはぬを奇とす。かの館の人々このことを聞きて大いに怪しみ、まづ箸を止めて、十郎掃守をも召具して寺に到る。

興義枕をあげて路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述ぶ。興義まづ問ひていふ、君試に我がいふこと

を聞かせたまへ。かの漁父文四に魚を誂へたまふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにして知らせたまふや。」興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大いなるを啗ひつゝ、奕の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛りたる桃を與へ、また盃を賜うて三獻飲ましめたまふ。繪手したり顔に魚を取りいでて繪にせしまで、法師がいふところたがはでぞあるらめ。」といふに、助の人々このことを聞きて、或は怪しみ、或は心地惑ひて、かく詳かなる言のよしを頻りに尋ぬるに、興義語りていふ、われこの頃病に苦しみて堪へがた

きあまり、その死したるをも知らず、熱き心地少し冷さんも  
のと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやう  
にて、籠の鳥の雲井に還る心地す。山となく里となく行き  
行きて、また江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現な  
き心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱捨て、身を跳らし  
て深きに飛入りつ。遠近を遊ぎ巡るに、幼きより水に馴れ  
たるにもあらぬが、思ふに任せて戯れけり。今思へば愚な  
る夢心地なりし。されども、人の水に浮ぶは、魚の快きには  
若かず。こゝにてまた魚の遊を羨む心起りぬ。傍に一つ  
の大魚ありていふ、「師の願ふこといと易し。待たせたまへ。」  
とて、杳の底に去ると見しに、しばしして、冠装束したる人の、

前の大魚に跨りて許多の鼈魚を率ゐて浮び來り、我に向ひ  
ていふ、「海若の詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今、江  
に入りて魚の遊を願ふ。故に金鯉が服を授けて、水府の樂  
みをせさせたまふ。たゞ餌の芳しきに味まされて、釣の絲  
にかゝりて身を亡ふことなかれ。」といひて、去りて見えずな  
りぬ。不思議のあまりに己が身をかへりみれば、いつの間  
に鱗金光を備へて、一つの鯉魚と化しぬ。怪しとも思はで  
尾を振り鰭を動かして、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山  
嵐立ちゐる浪に身を乗せて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち  
人の裳の裾ぬらす行きかひに驚かされて、比良の高山影映  
る深き水底に潜くとすれど、隠れ堅田の漁火によるぞうつ

つなき。ぬばたまの夜中の瀉に宿る月は、鏡の山の峯に澄みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山竹生島、波にうつろふ朱の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕出づれば、葦間の夢を覺され、矢橋の渡りする人の水馴棹を遁れては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日暖かなれば浮び、風荒き時は千尋の底に遊ぶ。俄に飢ゑて物ほしげなるに、遠近に糞り得ずして狂ひ行くほどに、忽ち文四が釣を垂るゝに逢ふ。その餌甚だ芳し。心また河伯の戒を守りて思ふ、「我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞも淺ましく魚の餌を飲むべき。」とてそこを去る。暫時ありて飢ますく、甚しければ、重ねて思ふ

に、「今は堪へがたし。たとひこの餌を飲むとも、嗚呼に捕られんやは。もとより彼は相識るものなれば、何の憚かあらん。」とて、遂に餌を飲む。文四早く絲を收めて我を捕ふ。「こはいかにするぞ。」と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が腮を貫きぬ。葦間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に圍碁して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大いにめでさせたまふ。我その時人々に向ひ聲を張上げて、「かたぐらは興義を忘れたまふか。宥させたまへ。寺に返させたまへ。」と連りに叫びぬれど、人々知らぬさまにもてなして、たゞ手を拍つて喜びた



まふ。繪手なるものまづ我が兩眼を左手の指にて強く捕へ、右手に磨ぎすませし刀を執りて俎に上せ、既に切るべかりし時、我苦しきのあまりに大聲をあげて、佛弟子を害する例やある。我を助けよ。」と哭きさけびぬれど、聞入れず。終に切らるゝと覺えて夢醒めたり。」と語る。

人々おほいに感<sup>か</sup>であやしみ、師が物語につきて思ふに、そのたびごとに魚の口の動くを見つれど、更に聲を出すことなかりき。かゝること眼のあたりに見しこそいと不思議なれ。」とて、從者を家に走らしめて、残れる繪を湖に捨てさせけり。興義これより病愈えて、はるかの後<sup>おのち</sup>天年<sup>てんねん</sup>をもてみまかりけり。その終焉に臨みて、畫くところの鯉魚數枚を取

閑院殿  
左大臣藤原冬  
嗣の邸  
古き物語  
古今著聞集十  
一、圖畫の篇  
にある

景清  
平氏、平家の  
侍大將  
佐々木  
名は高綱

りて湖に散せば、畫ける魚紙繭を離れて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なるもの、興義が神妙を傳へて時に名あり。閑院の殿の障子に雞を畫きしに、生ける雞この繪を見て蹴たるよしを古き物語に載せたり。 (雨月物語)

### 五 出世景清

近松門左衛門

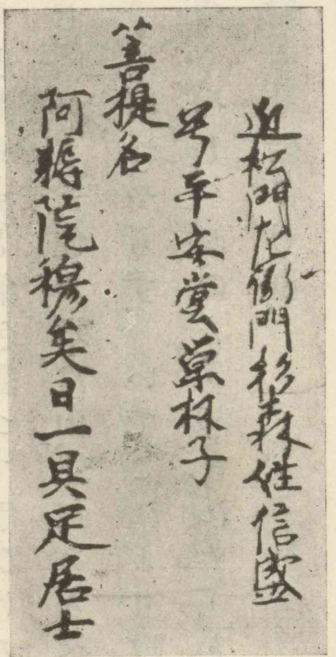
右大將頼朝公、南都の大佛御再興まし、既に成就と訴ふれば、供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと、天が下の科人、京鎌倉の牢を開き、残らず御免なされける、中にも悪七兵衛景清は、大事の朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四

郎に仰付けられ、終に首を刎ねられ、今は四海太平なり、大佛供養御聽聞あるべしと、諸國の諸大名御供にて、南都に御下向なされける、路次の行列花やかなり。

既に我が君巨椋堤おぐらづつみに差掛り給ふ時、畠山重忠息をはかりに馳來り、御馬の前に跪き、扱も悪七兵衛景清は、御成敗の由承り候へども、未だ恙なく牢の内に罷在候。一大事の囚人なれば、早速首を刎ねられ然るべく候はん」と、謹んで申上ぐる。頼朝公聞召し、不思議のことを申すものかな。景清は佐々木の四郎に申付け、一昨日の暮ほどに首打たせ、即ちその首頼朝が見參して、獄門にかけてさせしが、僻事なるか」と仰せらる。重忠重ねて、その段は存せず候へども、重忠は今朝

巨椋堤  
山城國宇治の  
ほとりに巨椋  
池がある、そ  
の堤をいふ  
畠山重忠  
通稱秩父庄司

近松門左  
衛門杉森  
性信盛號  
平安堂菓  
林子  
菩提名  
阿禪院穆  
矣日一具  
足居士



近松門左衛門筆蹟

景清が生顔を慥に見てまゐり候。といひも果てぬに、佐々木の四郎つゝと出て、いやこれ畠山殿筋なきことな申され。その景清は某仰を承り、高綱が手にかけて首を刎ね、我が君の實檢にそなへ、三條躰に獄門にかけて候も、のを、景清が二人あるべきか。近頃粗忽千萬」と、嘲笑つて申さる。重忠聞き給ひ、尤もく、御分が手にもかけつらめ。また重忠も慥に見て候は如何に。「高綱色を違へ、はて埒もないこと、一度斬つたる景清が蘇るべきやうもなし。それは定め

て血迷うて何かな見つらん。但しは寢惚けて夢をば見給ふか。「いやさ、御分がうろたへて、由なき者を景清と思ひ斬つたるか。」夢を見たるか。「あわてたるか。」これ目を覺して思案せよ。」と、氣色變つて争ひける。頼朝公だん／＼聞召し、「いかさま、佐々木・畠山、粗忽あるべき人にてなし。不思議千萬晴れやらす。いでこれより取つて返し、頼朝すぐに見分くべし。おの／＼靜まれ／＼。」と、御馬の鼻を立直し、都に歸らせ給ひけり。

さるほどに、三條の畷に景清の首を斬りかけ、平家の一族謀反の頭領、惡七兵衛景清と高札を添へられたり。頼朝公立寄り御覽あり、高綱・重忠を招き、「これ見られよ。」と仰せける。

歴劫不思議  
法華經普門品  
第二十五に、  
「弘誓深如海  
歴劫不思議」  
とある。萬劫  
を経て、解し  
がたい、不思  
議の意

重忠も不審晴れず、諸大名立ちかゝり、よく／＼見れば、今まで景清の首と見えけるが、忽ち光明赫々として、千手觀音の御首と變じ給ひける。歴劫不思議ぞ有難き。しかつし所へ、清水寺の大衆達、我も／＼と馳參じ、扱も一昨日の夜中より、佛前の蔀おの／＼開きて候ゆる。若し盗人の業にやと、御戸を開きて候へば、觀音の御首切れて失せさせ給ひ、切口より血流れて、禮盤・長床・朱に染み、勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候ゆる。驚き入つて注進申上候。」と、事の次第を申上ぐれば、君を始め奉り、畠山も高綱も、供奉の上下おしなべて、あつと感ずるばかりなり。君信心の感涙を流させ給ひ、誠や、景清年來清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より三十七の

今日まで、毎日三十三卷の普門品を、讀誦懈怠なく修行せしと聞きけるが、疑もなく觀世音、兵衛が命に代らせ給ふ有難さよ。」と、御手を合させ給ひければ、僧俗男女下々まで、皆々禮拜恭敬して、涙を流さぬものもなし。重ねての御誂には、かくてはいかゞ勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の護摩を焚かせ、御首を繼ぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面致すべし。いざ頼朝も參詣せん。」と、御身を淨め、佛の御首を直垂の袖に請入れて、清水寺への御參詣、ためし稀にぞ聞えける。

枯れたる  
いづれの佛の  
願より、千手  
の誓ぞたのも

枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ぞ有難き。かくて頼朝公御法事も事終り、佛の御首を繼ぎまゐらせ、宿坊に入ら

しき、枯れたる草木もたちまちに、花咲きみのると説きたれば云々  
(古今著聞集)

せ給ひけり。時に佐々木、畠山、景清夫婦を伴ひ、御前に出でらる。頼朝公御覽じ、珍しや景清、我を平家の敵とて狙ひ討つべき志、神妙々々。尤も武士の憤げにさうもあるべけれ。然れば、頼朝が爲には御邊また敵なれば、討つて捨つべきものなれども、汝が身には觀世音入替りましますゆゑ、二たび誅せば觀音の御首を二たび打つ道理、勿體なし。若しまた頼朝運盡きて、御邊に討たるものならば、觀世音の御手にかゝると思ふべし。この上は助け置き、日向國宮崎の庄を宛行ふ。」と、御懇情の御詞に、御判をそへてぞ賜はりける。景清涙を留めかね、誠に身に餘りたる御誂の段、生々世々に有難く、魂に徹つて覺え候。かく情ある我が君と知らで、狙

ひ申せし景清が、所存の程こそ悔しけれ。」と、御前をも打忘れ、  
聲を揚げてぞ泣きゐたる。さて御土器賜はり、諸國の大名  
残りなく、皆々盃さし給ふ。重忠仰せけるは、「かゝる目出た  
き折といひ、かつうは我が君の慰みのため、和殿八島にて功  
名の様子、語りて聞かせ給へ。内々君も御所望ありしぞ、平  
に平に。」とありければ、頼朝公を始め参らせ、満座の人々一同  
に、「はやくとくく。」とこそ望まるれ。景清辭するに及ばねば、  
袴の裾を高く取り、御前に色代し、過ぎし昔をぞ語りける。

「いでその頃は壽永三年、三月下旬のことなりしに、平家は  
船、源氏は陸、兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんと欲す。  
能登守教經宣ふやう、「去年播磨の室山、備中の水島、鴨越に至

いでその頃は  
以下の物語は  
謡曲景清の文  
句そのまゝを  
引用したので  
ある  
教經  
平氏、教盛の

子、壽永四年  
(八四) 歿、年  
二十六

るまで、一度も味方の利なかりしこと、偏に義經が謀いみじ  
きによつてなり。いかにもして九郎を討ちとる謀略こそ  
あらまほしけれ。」と宣へば、景清心に思ふやう、判官なればと  
て、鬼神にてもあらばこそ。命を捨てば易かりなんと、教經  
に最後の暇乞ひ、陸に上れば源氏の兵、餘すまじとぞ駈向ふ。  
景清これを見て、もの／＼しやと夕日影に、打物ひらめかい  
て切つてかゝれば、こらへずして刃向ひたる兵は、四方へば  
つとぞ逃げにける。さもしや方々よ、源平互に見る目も恥  
かし。一人をとめんことは、案の打物小脇にかいこんで、な  
にがしは平家の侍、悪七兵衛景清よと名乗りかけ、手取  
にせんと追うて行く。三保の谷が着たりける兜の鍔を取

三保の谷  
十郎國俊

りはづし取りはづし、二三度逃延びたれども、思ふ敵なれば逃さじと、飛びかゝり兜を押取り、えいやと引く程に、鋳は切れてこなたに留れば、主は先へ逃延びぬ。遙に隔てて立歸り、「さるにても汝恐しや、腕の強さ」といひければ、景清は「三保の谷が首の骨こそ強けれ」と、笑つて左右へ退きにける。昔を忘れぬ物語、恥かしう候」と語り給へば、人々は一度にどつとぞ感じける。

かくて我が君御座を立たせ給ひければ、大名小名續いて座をぞ立ち給ふ。景清君の御後姿をつくくゝと見て、腰の刀をすりと抜き、一文字に飛びかゝる。おのゝゝこれはと氣色を變へ、太刀の柄に手を掛くれば、景清退つて太刀を

捨て、五體を抛ち涙を流し、はゝあ南無三寶淺ましや。いづれも聞いて給はれ。かく有難き御恩賞を受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返る恨の一念、御姿を見申せば、主君の敵なるものをと、當座の御恩ははや忘れ、尾籠の振舞面目なや。眞平御免を蒙らん。誠に人の習にて、心に任せぬ人心、今より後も我と我が身をいさむとも、君を拜む度毎に、よもこの所存は止み申さず、却つて仇とやなり申さん。とかくこの兩眼のあるゆるなれば、今より君を見ぬやうに」と、いひもあへず差添抜き、兩の眼玉を抉り出し、御前に差上げて、頭をうなだれゐたりけり。頼朝甚だ御感あり、前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬ如く、また頼朝が恩をも忘れず、末世に忠

を盡すべき、仁義の勇士、武士の手本は景清。と、數の御褒美淺からず、鎌倉さして入り給へば、なほ景清は觀音に、三萬三千三百卷の普門品を讀誦して、日向國を本領し、悦びく退出す。なほく源氏の御繁昌、國靜謐の始なるはと、皆萬歳をぞ唱へける。

### 六 高 砂

ワキ次第「今を始の旅衣、今を始の旅衣、ひもゆく末ぞ久しき。詞」そもくこれは九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とは我がことなり。我いまだ都を見ず候ほどに、この度思ひたち都に上り候。またよき序なれば、播州高砂の浦をも一見

高砂  
加古郡高砂

町、加古川口、川を隔てて尾上村に對する、高砂神社境内に相生松一名高砂の松がある

尾上の鐘  
尾上村にある  
尾上寺の鐘  
誰をかも  
誰をかも知る  
人にせん高砂の松も昔の友ならなくに  
(藤原興風、古今集)

せばやと存じ候。道行「旅衣末はるく」の都路を、末はるばるの都路を、けふ思ひたつ浦の波、舟路のどけき春風の、いく日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるくと、さしも思ひし播磨湯、高砂の浦に着きにけり、高砂の浦に着きにけり。シテツレ一聲「高砂の松の春風ふき暮れて、尾上の鐘も響くなり。ツレ」波は霞の磯がくれ、二人音こそ潮の満干なれ。シテサシ「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならで、過ぎこし世は白雪の、積りくく、て老の鶴の、埒に残る有明の、春の霜夜のおきるにも、松風をのみ聞きなれて、心を友と菅筵の、思を述ぶるばかりなり。二人歌「おとづれは松に言問ふ浦風の、落葉衣の袖そへて、木蔭の塵を搔かうよ、木蔭の塵を搔かうよ。

處は高砂の、處は高砂の、尾上の松も年古りて、老の波も寄りくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて、なほいつまでか生きの松、それも久しき名所かな、それも久しき名所かな。

ワキ詞「里人を相待つところに、老人夫婦來れり。いかにてれなる老人に尋ぬべきことの候。シテ詞「こなたのことにて候か。何事にて候ぞ。ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ。シテ「唯今木蔭を清め候こそ、高砂の松にて候へ。ワキ「高砂・住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに、何とて相生の松とは申し候ぞ。シテ「仰の如く古今の序に、高砂・住の江の松も、相生のやうに覺えとあり。さりな

住の江  
攝津國東成郡  
住吉

がらこの尉は、津の國住吉のもの、これなる姥こそ當所の人なれ。知ることあらば申させ給へ。ワキ「ふしぎや見れば老人の、夫婦一緒にありながら、遠き住の江・高砂の、浦山國を隔てて住むといふは、いかなることやらん。ツレ「うたての仰候や。山川萬里を隔つれども、互に通ふ心づかひの、妹背の道は遠からず。シテ「まづ案じても御覽ぜよ。シテツレ「高砂・住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし。ましとや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともにこの年まで、相生の夫婦となるものを。ワキ「いはれを聞けばおもしろや。さて、曩に聞えつる、相生の松の物語を、處にいひおくいはれはなきか。シテ「昔の



人の申ししは、これはめでたき世のためしなり。ツレ、高砂といふは上代の、萬葉集のいにしへの儀。シテ、住吉と申すは、いまこの御代に住みたまふ延喜の御事。ツレ、松とは盡きぬ言の葉の、シテ、榮は古今相同じと、シテツレ、御代をあがむるたとへなり。ワキ、よくくく聞けばありがたや。今こそ不審はるの日の、シテ、光やはらく西の海の、ワキ、かしこは住の江、シテ「こゝは高砂。ワキ、松も色そひ、シテ、春も、ワキ、のどかに、地、四海波しづかにて、國も治まる時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや。あひに相生の松こそめでたかりけれ。げにや、仰ぎても、言もおろかや、かゝる世に住める民とてゆたかなる、君の恵ぞありがたき、君の恵ぞありがたき。

ワキ詞「なほくく高砂の松のめでたきいはれ、詳しく御物語り候へ。地、クリ、それ草木心なしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春の徳をそなへて、南枝花はじめて開く。シテ、サシ、然れどもこの松は、そのけしきとこしなへにして、花葉時を分かす。地、四つの時至りても、一千年のいろ雪の中に深く、または松花のいろ十かへりともいへり。シテ、かゝるたよりを松が枝の、地、言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて、シテ、生きとし生けるもの毎に、地、敷島の蔭によるとかや。クセ、然るに長能が言葉にも、有情、非情のその聲、みな歌にもるゝことなし。草木、土砂、風聲、水音まで、萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き、秋の蟲の北露に鳴くも、みな和歌の姿なら

長能  
藤原氏、一條  
天皇の頃の歌  
人

始皇  
秦の始皇

高砂の  
高砂の尾上の  
鐘の音すなり  
曉かけて霜や  
おくらん(大  
江匡房、千載  
集)

ずや。中にもこの松は萬木にすぐれて、十八公のよそほひ、  
千秋の縁をなして、古今の色を見ず。始皇の御爵にあづか  
るほどの木なりとて、異國にも本朝にも、萬民これを賞翫す。  
シテ「高砂の尾上の鐘の音すなり。地「曉かけて霜はおけども  
松が枝の、葉色は同じ深緑、立寄る蔭の朝夕に、搔けども落葉  
の盡きせぬは、まことなり松の葉の散失せずして、色はなほ  
正木のかつら長き世の、たとへなりける常磐木の中にも名  
は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめでたき。  
ロンギ地「げに名を得たる松が枝の、げに名を得たる松が枝  
の、老木の昔あらはして、その名を名のり給へや。シテツレ「今  
は何をかつゝむべき。これは高砂住の江の相生の松の精、

なるを

攝津國武庫郡  
鳴尾

我見ても

この歌、伊勢  
物語に、「昔み  
かど住吉に行  
幸し給ひけ  
り」と前書し  
て載せてある  
むつましと  
「むつましと  
君は知らずや  
瑞籬の久しき  
世より祝ひえ  
めてき、伊勢  
物語に、「前の  
歌の次に、「神  
現形に給ひし  
て載せてある

地「夫婦と現じ來りたり。地「ふしぎや、さては名どころの松  
の奇特をあらはして、シテツレ「草木心なけれども、地「かしこ  
き代とて、シテツレ「土も木も、地「わが大君の國なれば、いつま  
でも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さんと、夕  
波のみぎはなる海人の小舟に打乗りて、追風に任せつゝ、沖  
の方に出でにけりや、沖の方に出でにけり。ワキ歌「高砂やこ  
の浦舟に帆をあげて、この浦舟に帆をあげて、月もろともに  
出でしほの、波の淡路の島蔭や、遠くなるをの沖過ぎて、はや  
住の江に着きにけり、はや住の江に着きにけり。  
後シテ「我見てもひさしくなりぬ、住吉の岸の姫松いくよ經  
ぬらん。むつましと君は知らずや瑞籬の、ひさしき代々の

西の海 西の海やあな  
きが原の潮路  
より現れ出で  
し住吉の神  
浅香湯 (下部直續  
古今集)  
住吉の附近に  
ある  
松根に  
倚松根而摩  
腰千年之翠  
滿手折梅  
花而挿頭  
二月之雪滿  
衣本朝文粹

神かぐら、夜の鼓の拍子をそろへて、すゝしめたまへ宮つこ  
たち。地「西の海あをきが原の波間より、シテ」あらはれ出で  
し神松の、春なれやのこんの雪の浅香湯。地「玉藻刈るなる  
岸蔭の、シテ」松根によつて腰をすれば、地「千年のみどり手に  
満てり。シテ」梅花を折つて頭にさせば、地「二月の雪ころもに  
落つ。

ロンギ地「ありがたの影向や、ありがたの影向や、月すみよし  
の神遊、御影を拜むあらたさよ。シテ」げにさまゝの舞姫の、  
聲もすむなり住の江の、松影もうつるなる青海波とはこれ  
やらん。地「神と君との道すぐに、都の春に行くべくは、シテ  
」それぞ還城樂の舞。地「さて萬歳の、シテ」小忌衣。地「さすかひ

なには悪魔を拂ひ、をさむる手には壽福をいただき、千秋樂は  
民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風颯々の聲ぞ樂  
しむ、颯々の聲ぞ樂しむ。

### 七 田子の浦曲

井上通女

十四日、明けがたにやどりを出づ。家々旅人の朝たつ  
けしきしるく、女どもの立出で送るなど見ゆ。馬どものい  
ばえわたしたるに、残りの夢もさめぬ。浮島が原に出でて、  
不二の嶺は夏なき山か吹きおろす  
あさかぜさむしうきしまが原  
江戸を出でてより日ごとに見やらるゝ富士の高嶺の、う

井上通女  
讃岐國の人、  
女流學者、元  
文三年(三三九)  
歿、年七十九  
浮島が原  
駿河國

時しらぬ  
花やかすみ霞  
やけむり時知  
らぬ富士の高  
嶺に湧ゆる春  
風(藤原忠良  
風雅集)

水無月の  
富士の嶺に降  
りける雪は水  
無月の望に消  
ぬればその夜  
降りけり(萬  
葉集)

すみどりにて、たくひなき山の姿の遙に雲を出でたるが、我  
が行く方に相向へる、心はかしこにのみあくがれつゝ、今日  
はいとゞ近づきもてゆくまゝに、はれぐしく目をそらに  
なして、時しらぬ。昔の人の詠めけん雪さへ今も見ゆれば、  
その世のふるごとともいとゆかし。

いづくよりふる白雪のつもりけん  
雲もおよばぬ富士のたかねに  
降りかふるほどや來るらん水無月の

仰見士峯高倚天 雲端玉立德容鮮  
千秋雪色映東海 一抹烟光讓淺間

足高の山  
愛鷹山

關  
足柄の關

神秀 豈爭他列嶽 仙蹤猶在 我危巔  
郷人若問途中事 好把此山比聖賢

高嶺よりこなたに横たはれるは足高の山といふ。かく  
名高くはれぐしきあたりに、いかではひよりけんとをか  
し。富士山神蹴くづしたまひたりとか。かたはになりて  
は立てるかひなくこそ。けふは日照りていと暑し。峯の  
ごとくなる雲遠く見ゆめれど、かげろふべくもなし。  
やくがごと苦しかりけり水無月の

照る日をさへよ夕立の雲  
足柄山に雲のかゝれるも見ゆ。  
よそにして過行く關のあとなれや

雲のみこゆるあしがらの山  
富士川舟にて渡る。水いと早くして、あやふげなり。

富士川のみなざる浪は時しらぬ

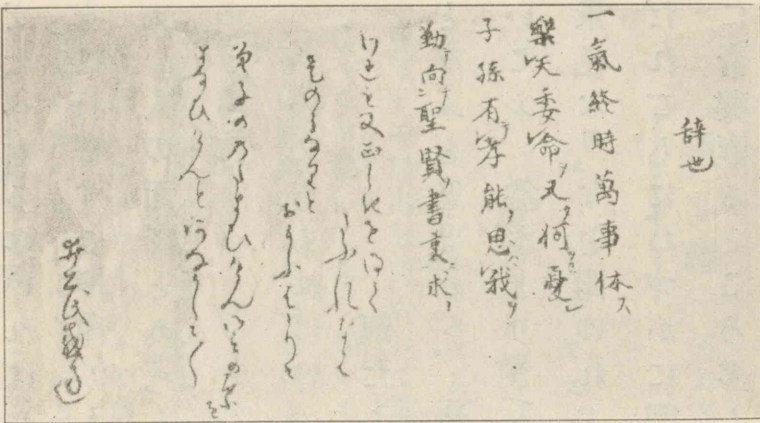
高嶺の雪や今もとくらん

その後、また少し小さき川をわたる。これを問へば、うるか川といふ。蒲原由井をすぎて、薩埵山をこゆ。中比まで、このあたりこよなう險しく、かたつ方は壁の如く立ちたる山の、かたつ方は海にて、たゞ細き道一つなれば、人も馬も僅にひとりぐならでは通りがたし。「親しらず子しらず」とかいひて、親子といへど相顧みることあたはざりしといふ。然るを、近き世に、この山をかく開き平げさせ給ひて、よろづ

蒲原  
駿河國  
由井  
駿河國  
薩埵山  
駿河國、興津、  
由井の間にあ  
る

田子の浦  
富士川口の海  
岸

一氣終時萬事休、  
命又何憂、  
子孫有孝、  
能思我賢、  
勤向聖賢、  
求書裏、  
求我賢、  
われも又正、  
たふれなば、  
是のみなば、  
とおもふべ、  
かりぞのた、  
まひけんの、  
言の葉をま、  
あなかしこ、  
井上氏感通



詩也

井上通女筆蹟

の人のゆきかひたやすくなれる  
は、道廣き御惠なりかし。  
田子の浦にしほたる、あまの  
家どもまばらにあやしげなる戸  
口より立出でて、磯邊にながめる  
たる、汐汲まんとにやと見るに、さ  
もせず、貝拾ふにこそ。げにさま  
ざまいとまなきしわざもあはれ  
なり。沖津にいたり、清見瀉を過  
ぎて、こゝは昔の人の心とゞめし  
から歌やまところのはのすぐれ

みし人の  
みし人のおも  
かげとめよ清  
見湯袖にせき  
もる浪の通路  
(藤原雅經、  
新古今集)

清見寺  
興津にある

益本  
この時同伴し  
てゐた通女の  
弟、通稱市兵  
衛

てたへなる多ければ、なかく拙き言の葉の見苦しからん  
をば、打寄する沖津波もすゝぎがたくやと、引きこめて、たゞ、  
「みし人の面影とめよ。」と、ひとりごととして過ぎはべるまゝ心  
のうち、

いのちあればけふまたこゝにきよみ瀉

浪たちかへるみぎはをも見つ

とぞふと思はるゝ。清見寺の門の前におろしたてて、暫し  
いこふ。益本よりきて、寺に入りて見給ひなんや、いとよき  
景色なり。など聞ゆれど、登ることもむつかしければ、このす  
だれごしに、わづかに門より見入れはべるのみ。向ひの家  
に膏藥賣るところ多し。(歸家日記)

後編

(自修文)

一 ジュリヤス、シーザー

シークスピヤ

第三幕 第二場——市場

ブルータス  
ローマの將軍  
(一節42)

カシヤス  
ローマの將軍  
(一節43)

シーザー  
ローマの大將  
政治家(節10)  
(一節44)

市民等、その理由わがを聞かして貰はう、理由わがを聞かして貰はう。  
ブルーでは従ついて來て聽いて下さい。……カシヤス、君は彼方の街へ往つて下  
さい、聽衆を二手に分けよう。……予わがの演説を聽かうとする諸君は此處に  
お留りなさい。カシヤスに從ついて行く人達は彼方へお出でなさい。國  
家の爲にシーザーを誅した所以を演説します。

一市民「わしはブルータスの演説を聽かう。」

二市民「わたしはカシヤスのを聽かう。さうして、雙方のを比べて見ることに  
しよう、別々に聽いてね。」

カシヤス市民の若干を引きつれて入る。ブルータス演壇に上る。  
 二市民ブルータスどのが登壇せられた。静に〜！  
 ブルータスまで静肅にして下さい。……ローマ人よ、國人よ、親友諸君よ！ 予



Rome

の主意を聴いて下さい、主  
 意を聴いて下さるために  
 静にして下さい。どうか  
 予の人格を信じて下さい、  
 信じて下さるために、予の  
 人格に重きをおいて下さ  
 い。予は諸君の賢明な批  
 判を乞ひます、どうか賢

明な批評者たるに適するやうに、諸君が分別力を活用せられることを望  
 みます。……若しこの群衆中にシーザーの眞の親友と稱すべき人が居ら  
 れるならば、予はその人に對つて、ブルータスがシーザーを愛する心も決

してその人に劣らなかつたと斷言します。然らば、何故ブルータスはシ  
 ーザーに刃を加へたか。と、かうその人が問はれたならば、予はかう答へる。  
 『それは、シーザーを愛する心が薄かつた爲ではない、ローマを愛する心が  
 更にそれよりも厚かつた爲である。』と、諸君はシーザーが生きてゐて、そ  
 れが爲に一同が奴隸となつて死ぬのを望まれますか、シーザーが死んで  
 一同が自由の人民となるよりも？……シーザーは予を愛してくれ、たゆ  
 るに、予は彼の爲に泣きます。彼は好運であつたゆゑに、予はそれを歡び  
 ます。彼は勇敢であつたゆゑに、予は彼を尊敬します。しかしながら、彼  
 は野心を抱いたゆゑに、予は彼を誅戮しました。愛に報いるに涙を以て  
 し、勇敢を稱するに名譽を以てし、野心を罰するに死を以てする。……此處  
 に奴隸となるのを願ふやうな卑劣な人間が一人でもあるか？ あるな  
 らお言ひなさい。その人に對しては、予は罪を犯した。此處にローマ人  
 たることを欲しないやうな野鄙な人間が一人でもあるか？ あるなら  
 お言ひなさい。その人に對しては、予は罪を犯した。此處にその國を愛

しないやうな卑劣な人間が一人でもあるか？ あるならお言ひなさい。その人に對しては、予は罪を犯した。予は返答を待ちます。

市民等「ないよ、ブルータス、ないよ。」

ブル―では、何人に對しても予は罪を犯さないのである。シーザーに對して予の爲たことは、諸君がブルータスに對してなさるべきことに外ならぬのです。シーザーを誅した理由は、逐一議事堂の記録に登記してあります、彼が榮譽・功績に屬することを滅殺しないと同時に、誅されるに至つた所以の罪惡の如きも決して誇張してはありませぬ……

アントニー及びその他の者、シーザーの死骸を擔荷ひつゝ出る。

アントニー  
ローマの雄辯家、シーザーの黨友（前82—前30）

あそこへ、マーク・アントニーが喪主となつて、シーザーの死骸を持參しました。

彼はシーザー誅戮の企圖には與りませなんだが、その利益は享樂して、この共和國に於ける相當の權利を得る筈です。これは諸君とても同様であります……さて、お別れするに臨んで一言することは――予はローマの幸福の爲に又とない親友を殺したのであるから、同じ短劔の此

の身に對して用ひられることを望みまする、若し我が國が予の死を欲する場合となつたならば

市民等「ブルータス萬歳！ 萬歳！ 萬歳！」

一市民「凱旋式で以てブルータスを自宅まで伴れて行かう。」

二市民「先祖のブルータスのと並べて肖像をおつたてようぜ。」

三市民「シーザーにしよう、あの男を。」

四市民「シーザーの美所だけがあの男の名譽とならうといふものだ。」

一市民「みんなで喝采したり囃し立てたりして、ブルータスを自宅まで伴れて

行かう。」

ブル―「國人諸君よ――」

二市民「しつ！ しつ！ 静に――！ ブルータス君の御演説だ。」

一市民「静に――！」

ブル―「國人諸君よ、予は一人で歸らして下さい。お願いですから、諸君はアントニーと共に此處に留つて下さい。シーザーの遺骸に敬意を表して下さい。」



さい、且シーザーの舊功を稱讚するアントニーの弔辭を聽いてやつて下さい、わたしどもが許してさせるのでありますから。予が願ひします。アントニーの弔辭が濟むまでは、一人も退場せられないことを望みます。

ブルータス入る。

一市民 待つたゞ！ マーク、アントニーの弔辭を聽かうよ。

二市民 アントニーを演壇に上らせませうぜ。弔辭を聽きませう。……アント

ニー君、お登んなさい。

アント、ブルータス君のお庇で、諸君忝く存じます。

四市民、ブルータスのことを何といつたい？

三市民、ブルータス君のお庇で、諸君に對し忝く存じますといつたよ。

四市民、こゝでブルータスのことを悪くいつちあ大變だからな。

一市民、あのシーザーといふ奴は酷い奴だつたね。

三市民、そりや君、さまつてらあね。あんな奴のゐなくなつたのはローマの幸

福だね。

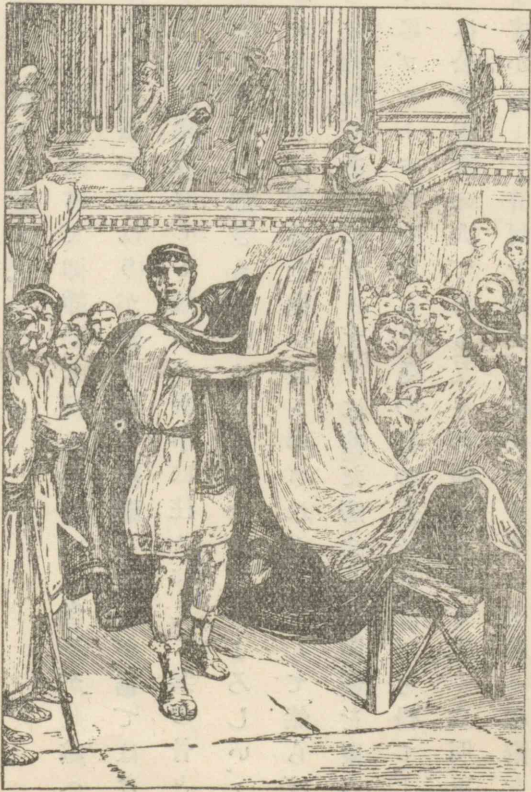
二市民、しつゝ！ アントニーがどんなことをいふか聽かうぜ。

アント、諸君よ、ローマ人諸君よ――

市民等、おいゝ、靜に！ 聽かうぜ。

アント、親友よ、ローマ人よ、國人諸君よ、御靜聽を煩はしたい。自分が此處へ參つたのは、シーザーの葬儀を行はうが爲で、彼を稱讚しようが爲ではない。人の行つた悪事は其の死後までも残るが、善事は往々にして其の骨と共に埋没します。シーザーの如きもまたさうあらせた方がよろしい。……ブルータス君は、シーザーは野心を抱いたと申された。果して然らば、それは甚だ痛ましい過失であつて、シーザーは甚だ痛ましい應報を蒙つたのである。こゝにブルータスをはじめその他の人々の許可を得て、――蓋しブルータスは公明正大の人であり、又その他の人々も悉く公明正大の人々でありますから――許可を得て、こゝにシーザーを葬るの辭を演べるのであります。……彼は自分の親友であつた、自分に對しては忠實な公平な友であつた。が、ブルータスは、彼は野心を抱いてゐたといはれる。

そして、ブルータスは公明正大の人である。……シーザーは嘗て夥多の捕虜をローマへ伴ひ還つた、その償金は悉く國庫に收められた。このシーザーの行爲が野心家らしく見えましたらうか？ ……嘗て貧民が飢餓に叫ぶのを聞いて、シーザーは涙を流した。野心は一層峻酷な素質のものでなければならぬ。なれども、ブルータスは、彼は野心を抱いたといはれる、そして、ブルータスは公明正大の人である。……諸君は何れも御覽に



演説のシーザー

リューパーカルの祭日  
リューパーカルの神の祭日

なつたであらう、リューパーカルの祭日に於て、自分は三度まで王冠をシーザーに呈した。それを彼は三度までも辭した。あれが野心でありませうか？ ……なれども、ブルータスは、彼は野心を抱いたといはれる、そして確かにブルータスは公明正大の人である。自分は決してブルータスのいはれたことを駁撃しようとするのではない、只知つてゐる限りの事實を申すのである。……諸君は何れも嘗てシーザーを愛して居られた、それには理由がなかつた譯ではない。然らば、如何なる理由で諸君は彼を哀悼することを差控へられますか？ ……お、判断力！ 是非を判ずる分別力は、今は獸類なぞの有に歸して、人間は理性を失つてしまつたのか？ ……御免下さい。予の精神はシーザーと一緒に此の柩の中に入つてしまつて居る、それが戻つて来るまでは物がいはれません。

一市民大分いつて居ることは道理があるやうだね。

二市民、正當に考へて見ると、シーザーは甚しい冤罪を蒙つたともいへるね。

三市民、ね、さうでせう？ もつと悪い奴が出て来て代るまいものでもないか

らね。

四市民「アントニーのいつたことにお氣が付きましたか？ シーザーは王冠を受けませんでした。だから、確かに彼は野心家ぢやなかつたのです。

一市民「いよ／＼さうだとすると、何處かの手合が嚴重い目に逢ふてせう。

二市民「やれ／＼、氣の毒なこつた！ 涕で以て目が火のやうに赤くなつてゐる。

三市民「ローマ中にアントニーほどの偉い人はないなあ。

四市民「さあ、聞いたたり／＼。又始めますよ、演説を。

アント「つい昨日までは、シーザーの一言は全世界に匹敵することも出来たのであつた。今や彼は此處に横たはり、如何なる卑しい匹夫でも、彼に尊敬の意を致さうとはしない。……お、諸君よ、若し自分が假にも諸君を煽動して憤激させ、反抗の念を起させるやうであると、これ取りも直さずブルータスを傷け、カシヤスを傷けることになるが、かの人達は諸君御存じの通り公明正大の人々である。自分がかの人々を傷けることを欲しない。自分はあのやうな公明正大な人々を傷けるよりは、寧ろ世に亡い者を傷

け、自分を傷け、諸君を傷けた方が當然と思ふ。……しかしながら、此處にシーザーの捺印を経た一葉の書面がある。自分は之をシーザーの納戸内に於て發見しました。即ち彼の遺言狀である。若し平民諸君をして只一寸此の遺言狀の主旨を聽かせたならば、御免なさい、無論自分は讀みはしないが、若し聽かせたならば、諸君はシーザーの死骸に驅寄つて、その傷口に接吻し、その神聖な鮮血に銘々の手巾を浸すどころでなく、その頭髮一筋をも後の記念にと争ひ求めて、その身の死なうとする間際には、遺言中にそれを記入し、永く子孫に譲り傳へるべき寶物ともせられるであらう。

四市民「その遺言狀が聽きたい。讀んで下さい、マーク、アントニー。

市民等「遺言狀、遺言狀！ シーザーの遺言狀が聽きたい。

アント「まあ／＼、お鎮まりなさい。遺言狀を讀んではなりません。シーザーが深く諸君を愛してゐたことを諸君が知られるのは宜しくない。諸君は木でも石でもなく、人間である。既に人間である以上は、シーザーの遺

言狀を聽かれたならば、必ずや深く感激して、狂氣のやうにもなられるであらう。諸君はシーザーの財産の相續者ぢやなどといふことは知られんが宜しい。若しそれを知られたなら、おゝ！どんなことになるやら圖られない。

四市民「遺言狀を讀んで下さい！是非聽きたいんです、アントニー。是非遺言狀を讀んで下さい、シーザーの遺言狀を。」

アント「しばらく。しばらく待つて下さい。……あゝ、つい不覺口走つてしまつた。公明正大の目的の爲に、短劍を以てシーザーを刺殺した人達を傷けることにならねばよいが、あゝ、困つたことになつた。」

四市民「彼奴等は謀叛人だ、公明正大どころかい！」「市民等「遺言狀を！」「その書面を！」

二市民「彼奴等は惡黨だ、人殺しだ。遺言狀を！」「遺言狀を讀んで下さい。」「アント「では、どうしても遺言狀を讀めといはれますか？」「では、シーザーの遺骸の周圍へ環形におんななさい、遺言狀を製した當人を諸君に見せませ

う。……壇を降りませうか？降りても宜しいですか？

市民等「降りなさい。」

二市民「降りたまへ。」

三市民「よろしいです。」

アントニー壇を下る。

四市民「環形だ、圍繞くんだ。」

一市民「樞から離れる、死骸から離れる。」

二市民「アントニーさんの道を開ける、どうも實に偉いアントニーさん。」

アント「これ、さう押しては不可。ずつと離れて下さい。」

市民等「退れ！開ける！退れ！」

アント「諸君に若し涙があるなら、今こそ流す準備をなさい。……諸君は何れも

此の外套を御存じてあらう。予はシーザーが始めて之を着用した日を

覚えてゐる。それは、或夏の夕方、勁敵ネルヴァイ族を征伐して大勝利を得たその日に、陣營中で着たのであつた。御覽なさい、これ此處をカシヤ

カスカ  
シーザー暗殺  
者の一人  
(前章以後)

カスカの短劍が刺貫いたのだ。御覽なさい、奸賊カスカめがどんなに斫つたか？ 此處をば子のやうに愛せられたブルータスCassiusが突通したのだ。即ち彼がその惡むべき刃を抜取つたその途端に、御覽なさい、シーザーの鮮血がその後を追つて、さながら人が戸口から走り出るやうに流れ出たのを、今無慚な叩き方をしたのは、よもやブルータスではあるまいか？ と見定めようとしたかのやうに。何故なれば、ブルータスは諸君も御存じの通りシーザーの守神同様であつたからです。如何に深くシーザーが彼を愛してゐたかは、おゝ神々よ、あなたがたが御承知のことだ！ これこそ最も殘忍無慈悲な切口であつたのだ。流石の大シーザーもブルータスが己を刺すのを見ては、――謀叛人の力よりも遙に怖い彼が思知らずの振舞を見ては――流石の大勇氣も打挫かれ、おのが外套で面を掩うて、ポンペイPompeyの像の脚下にさへも大シーザーは倒れたのだ、血汐は泉と流れる間に。おゝ！ 國人よ、同胞よ、シーザーが倒れたのは國が倒れたのも同様です。それと同時に、自分も、諸君も、我々悉くが倒れたのだ。そして、

ポンペイ  
ローマの大將  
政治家(前106  
―前48)

殘忍無慚の叛逆人等は倒れた我々を眼下に見下して、凱歌を奏し勝誇つた……おゝ！ 今こそ諸君は泣く、――して見ると、流石に惻隱の感に堪へられんと見える。あゝ、その涙こそは實に恩を知り義を知る涙だ……やあ！ 諸君、これは只シーザーの外套に傷がついたに過ぎない。然るに、諸君は之を見てさへもお泣きなさるか？ ……さ、これを御覽なさい、これが本人です、これこの通り謀叛人共に切りさいなまれた本人です。

- 一市民「おゝ氣の毒な有様ぢや！」
- 二市民「おゝ偉い！ シーザーどのを！」
- 三市民「おゝ情ないことぢや！」
- 四市民「おゝ謀叛人めら！ 惡黨めら！」
- 一市民「おゝ無慚な！ 有様！」
- 二市民「復讐をしよう。」
- 市民等「復讐をしよう！ ……出かけろ！ ……捜せ！ ……焼打しろ！ ……火をつけろ！ ……殺せ！ ……やつつけろ！ ……謀叛人めらは一人でも生か

しておくな。

「アント」お待ちなさい、お待ちなさい。

「市民」しつ／＼！ アントニーさんが何かいつてゐる。

「市民」おい／＼あの仁のいふことを聴かう、あの仁に従いて行かう、あの仁と

一緒に死なう。（坪内逍遙譯「ジュリヤス、シーザー」）

## 二 自然の個性化

吉野山

八田知紀の歌

A 先生、吉野山、霞の奥は知らねども、見ゆるかぎりには櫻なりけり。——この歌は嘘ですよ。

B なぜ？

A 私はこの春實地に吉野山の花を見ましたが、とてもそんな感じは起りませんでした。

B それは君の感じて、作者の感じとは別さ。

A だつて、事實が間違つてゐますもの。

B どこが？

A 第一、そんなに澤山櫻はありません。一目千本だなど、全く針小棒大な形容です。

B 自分はまだ一度も實地を踏んだことがないから、何ともいへないが、とにかく綺麗は綺麗だらう？

A それは勿論綺麗です。しかし、豫想は裏切られます。

B 君の想像が大き過ぎたからだらう。

A しかし、霞の奥は知らねども、とか、これは／＼とばかり花の吉野山、とか、古人があまり大袈裟に言過ぎてゐますから、見ない中は誰でも大きな豫想を抱かすにはゐられません。

B それはさうだ。僕も一度は是非花の吉野を見たいと思つてゐる。

A 御用心なさいませんと、幻滅の悲哀を感じますよ。

B 有難う。しかし、僕は失望しないだらう。

A どうしてです？

これは／＼  
安原貞室の句

## 二 自然の個性化

B 詩人だから。

A え？

B 詩人は君のやうに事實の穿鑿をしないからね。よし穿鑿をするにしても、修辭の誇張を解してゐるからね。

A それは私だつて誇張ぐらゐは解してゐますよ。しかし、方外な誇張は私の認識が許しません。

B 君の認識は許さなくても、僕の認識は許すかも知れない。例へば、富士山の形容だが、或人は、來て見ればさほどにもなし」と歌つた。多分君のやうに理智の發達してゐる人だつたらう。でなければ、反對意志の強い男で、人が右といへば左といひたがる人だつたらう。然るに、僕は富士の雄姿を仰ぐ度毎に、赤人の、渡る日の影もかくろひ、照る月の光も見えず、白雲もい行きはゞかり、時じくぞ雪は降りける。に共感する。畢竟人々の個性の相違によることだ。  
A 御説御尤もですが、しかし、方外な誇張は寧ろ滑稽です。

來て見れば  
來て見ればさ  
ほどにもなし  
富士の山輝迦  
や孔子もかく  
やあららん  
赤人  
山部氏

B 名説々々！ 誰かの美學にもあつたやうだが、個性一方に偏して毫も

類型的のものを表現しない藝術は、永續的興味を生じがたい。若し作者の個性があまりに人間離れして、蟻を鯨と見るやうでは、社會性を缺いて、とても永續的藝術とはなり得まい。しかし、藝術は自然の個性化である。といふことはどこまでも眞理だ。

A それはさうです。

(この時Cが口を挿んだ)

C 「自然の個性化とは一體どんなことですか？」

B イソップ譚に面白い譬喩がある。題は「物真似師と百姓」であるが、内容はかうだ。――豚の假聲をつかふ物真似師があつて、非常な好評を博した。これを見た一人の百姓が、僕は明晩もつと上手にやつて見せるといつた。さうして、實際の豚の子を懐に入れて行つて、密に豚の子の耳を引張つた。すると、豚の子が苦しさに鳴いた。けれども、見物人は誰も褒めなかつた。百姓は怒つて、諸君はなぜ僕に喝采しませんか。物真似師のはどん

イソップ譚  
ギリシアの寓  
話作者イソッ  
プの作

なに真に迫つてゐても、物真似に過ぎない。しかるに、僕のはこれこの通り、と豚の子を示して「正真正銘の豚の子の鳴聲であるのに！」と叫んだ。イソップはこれをどんな場合の諷諭にしたか知らないが、僕は非常に面白いと思ふ。誰かが「藝術は自然に人間を加へたものだ」といつたが、全く事實だ。自然そのものは藝術でない。美ではあつても藝術ではない。自然に個性の加工を施して、茲に始めて藝術が成立つのだ。

C ではどんな加工でも構ひませんか？

B といふのは？

C どんな詰らぬ個性でも、自然に個性の加工を施せば、それが立派な藝術品と呼ばれますか？

B 立派などとは呼ばれない。「人の頭に相應して星の數も存在する」といはれてゐる通り、卑俗な個性は卑俗な藝術品しか作り得ない。理智に長けた人の作は、たとひ事實の眞は傳へ得ても、藝術の眞は傳へ得ないものだ。（この時Aは奮然として）

A だつて、先生、我々二十世紀の人間は既に科學の洗禮を受けてゐますから、事實の眞を傳へないものには、到底我慢することが出来ません。

B では童謡はどうします？ 童謡はどうします？

A あれは子供の藝術ですから……

B 詩人は永久に子供です！ 總べての物に生命を見出し、愛を見出す子供です……とはいへ、文藝上の眞も時とともに推移するから、貴説のやうに、科學の眞を全く無視した作品は、或は世に遠ざけられる時代が来るかも知れない。夏目さんの文學論にも、公衆の趣味が一變して非科學的の敘述を嫌ふ時代が來たら、沙翁も光明を失ふだらう」と述べてある。しかし、まだ、そんな時代は來ないよ。

A 次第にそんな時代が近づきつゝあります。

B さあ、それはどんなものかね？

### 三 夢の文學と現の文學

五十嵐 力

夏目  
名は金之助、  
號は漱石、東  
京市の人、文  
學者、大正五  
年歿、年五十  
沙翁  
シエークスビ  
ヤ  
五十嵐力  
米澤市の人、  
明治七年生、  
文章家、文學  
博士、早稻田  
大學教授



テレンス  
ローマの詩人  
喜劇作者(前  
165—前159?)

「人間に關することは、すべて自分に取つて餘所事とは思はれない」とはローマの詩人テレンスの名高い言葉である。この言葉の意味を實現して、作中に描寫したことを他人事ひとごとでなく感じさせるのが文學の職分だと、英國の一批評家は説いてゐる。奈良朝・平安朝のかた今日に至るまでの我が日本文學は、いづれも我等に對して餘所事を語つてはゐないけれども、特に明治以後の文學はいづれも我等に對して餘所事でないといはれるべき理由を持つてゐる。それは我等自身の時代の文學であるがためばかりではない。明治以後の文學の我等に對する親しさは、王朝文學が奈良・平安朝時代の國民に對し、室町文學が足利時代の國民に對し、江戸文學が徳川時代の國民に對する親しさの比でない。否、若し王朝・足利・江戸各時代の國民が蘇生して明治以後の文學を見たなら、彼等もまた彼等の時代の文學よりも一層痛切に彼等の生活の眞實を描寫してゐること、一層深く彼等の身に沁み心に應へることを感ずるであらう。蓋し明治以前の文學には概して理想的・傳奇的・技巧的・典據的の傾向があつた。作者は自然界・人間界から材料を取

るとはいふものの、自然・人事を忠實に描寫するといふよりは、寧ろこれに技巧を加へて、面白可笑しく想像譚を拵へるといふ傾向があつた。「あることそのことを描寫しないで、あれかし、あらかし」をば描寫しようとする傾向があつた。美醜・善惡の實相そのまゝを描寫するといふよりは、寧ろ綺麗きれいな面白い所だけを集めて寄細工をするといふ趣があつた。即今實用の活きた語を用ひて眼前流行の事實を描寫するといふよりは、寧ろ由來つきの雅言を用ひて昔風に仕組むといふ趣があつた。これが明治以前の文學に通ずる大特色・大傾向である。暢氣で、風流で、浮世離れがして、優游自適するといふのがその時代の作者の態度であつた。消閑の具を供する、物の哀れを知らせるといふのがその目的であつた。彼等が自ら稱して戲作者といひ、風流人といひ、みやびをといひ、韻士、騷客、逸民などというたことが、よく彼等の傾向を現してゐる。要するに、人工を加へて拵へるといふのが、明治以前の文學者の狙つたところで、隨つて觀客もまた技巧の加はつたところ、理想的・典據的などところを賞揚するのが普通であつた。

明治以後——特に最近の文學は全くこれとその趣を異にしてゐる。明治以前の「夢の文學」とすると、明治以後のは「現の文學」ともいふべきであらう。彼の理想的であるのに對して此は現實的、彼の傳奇的であるのに對して此は自然的、彼の典據的であるのに對して此は習俗打破的である。明治以後に於ける新文學の作者は、技巧らしい技巧や、見え透く人工や、鼻につく細工を排斥して、自然人事をありのままに描寫しようとする。「あれかし」「あたましかば」の理想を描寫しないで、あることそのことを描寫しようとする。善美の方面ばかりを採らないで、善惡美醜混淆の實相を描寫しようとする。時としては、従來の傾向に對する反動として、醜惡な方面、殊に肉慾の寫實に力瘤を入れる。徹の生えた古言、わざとらしい修辭を捨てて、活きた言語で活きたことを描寫しようとする。首尾具足の纏まつたものに作り上げないで、自然の流の一部を前後に切離して見せようとする。彼等はもはや暢氣な風流漢、洒落三昧の戲作者ではなくて、天から指定された趣味の宣傳者である。眞理を討究するのが學者の本分、正善を教へるのが道德家宗教家

の本分なら、己は美を描き趣を寫すといふ重要な一方を擔當して、儼然として彼等と鼎立しようといふのが、明治以後の文學者の意氣込である。彼等は文學を書く時の態度を言表して、眞面目といひ嚴肅といふ。要するに、彼等の特色はあくまでも現實的、自然的である點に存する。讀者の趣味もまたこれと同様に變化した。明治以後の讀者は、理想を書いた作、拵へたやうな作を悦ばないやうになつた。彼等の實際に楽しむところ、苦しむところ、味ふところ、煩悶するところをそのまま書いたものではない、彼等は心を動かさないやうになつた。昔は鬼神を感じさせた傑作も、今は鬼神を感じさせるのはおろか、童幼の嗤さへ買ふほどに趣味が激變して來た。理想的と現實的、技巧的と自然的。明治以前の舊文學と明治以後の新文學の間には巨大な溝渠がある。それは徳川時代の文學と奈良朝時代の文學の隔離の比でない。我が日本の文學は明治維新を境界として、混ざることの出來ない二大群に分れたと見られる。

さて、我が最近の文學をして、急激な大變化、現實的自然的習俗打破的、個人的にならせた大變化は、西歐文學の影響を離れて考へることは出來ぬ。また、十九世紀以來、世界人心が現實に興味を感じて來たこと、科學研究の進歩の結果、眼前の事實に目を塞ぐことの出來ないやうになつたこと、自意識の鋭くなつたこと、生存競争が激しくなり生活が困難になつたこと、前代の流行に鑿あいたことなど、皆この變化の因縁となつたのである。(新國文學史)

#### 四 ヘレン、ケラー

目も見えず、耳も聞えず、口も利けなくて、偉大な學者になつたのは、世界にヘレン、ケラー一人あるだけでせう。塙保己一やミルトンなどといふ偉大な人もありますけれども、ミルトンは晩年から盲目になつたのであり、保己一は幼少から目が見えなくなつたものの、二人とも聞くことも出來、話すことも出來たのであります。しかし、ヘレン、ケラーは生後十九箇月目に盲となり、耳も聞えなくなると

ミルトン  
英國の詩人  
(1608—1674)

同時に、物をいふことも出來なくなつてしまつたのであります。それにもかゝらず、非常な努力の結果、ハーヴァード大學(普通人の行くまでも卒業し、偉大な文學者、思想家となつて、現在ではアメリカの明星とまで仰がれてゐます。女史の今日あるのこそ、實に偉大な努力の賜といふことが出來ませう。「天才は努力なり」とはよくもいつたものであります。

ヘレン、ケラーは千八百八十年六月二十七日に、アメリカ合衆國の或小さな町に生れました。父は陸軍大尉で、後に新聞記者となり、母は賢い婦人でありました。

彼女は生れて十九箇月目に、激しい腦病を患ひひました。そして、一時は死を危あまれましたが、母の獻身的な看護によつて、命だけは取止めたのであります。しかし、不幸にも、恢復した時には、盲聾めうとうといふ、生れもつかぬ不具者となつてゐたのであります。

それまでは、物が見えてゐたのは勿論、ませた子供でしたから、「今日は」などといふことまでいつてゐたのでしたが、病後耳も聞えなくなり、同時に物も

パン  
ボルトガル語

いへなくなり、やがて不斷の暗黒と沈黙に慣れ、遂には自分が嘗て話をしてゐた物を見てゐたといふことさへ忘れて、大きくなつたのであります。

しかし、いかに盲で聾で啞であるとはいへ、自分の心持を他人に告げたい時がありませう。彼女はそれを身振手真似で告げました。嫌と思ふ時には頭を振り、よいと思ふ時には頷いて見せました。そして、パンが欲しい時には、パンを裂いてバターButterを付ける真似をしました。滑稽で面白いのは、アイスクリームIce creamをねだる時でした。さういふ時には、まづ器械を廻す真似をし、それからぶる／＼と身振ひをして見せました。しかし、自分の氣持をどうしても人に通じさせることが出来なない時には、焦れてはよく泣きました。兩親も非常にこれを悲しく思つて、慰めることに骨折つたのであります。が、彼女は自分だけが盲で聾で啞であるとは素より知りませんから、平生は愛犬や黒ん坊の料理番の娘などと仲よく遊びました。

彼女は犬と人間とは違ふといふことを知らなかつたものですから、愛犬に一所懸命手真似をして見せて、非常に失望したことがありました。しか



し、黒ん坊の娘は彼女の手真似をよく理解しますし、それに非常におとなしかつたので、彼女はその娘と大變親しみました。

自分が不具であるといふことに薄々氣づき出したのは、七歳近くになつてからでありました。或日來客がありました。彼女は母の側にあつて身振や手真似で自分の心持を發表してゐましたが、偶然母の顔に手をやつたところが、その唇が動いてゐることに氣がつき、そして、母達は唇を動かして自分の氣持を他人に通じるのだといふことを知りました。そこで、彼女は來客に向つて熱心に自分の唇を動かして見ましたが、何の反響もありませんでした。彼女はなほも熱心になつてやつて見ましたが、や

ばり何の甲斐もありませんでしたので、絶望してわつと泣出し、そして、自分の思ふことを傳へることが出来ないのを悲しんで、いつまでもくく泣きました。諸君、私達は満足に口の利けることを感謝しようではありませんか。彼女は手さぐりて父が毎朝眼鏡をかけて、自分の前に大きな紙を擴げてゐることを知りました。彼女はこれに倣つて、或時、眼鏡をかけて自分の前に大きな紙を擴げて見ましたが、それは何にもなりません。彼女が、それは新聞といふものであり、父はその記者をしてゐるといふことを知つたのは、それから六七年の後でありました。

彼女は自分の思ふことを他人に知らせることが出来ないの、泣倒れ、悶え抜いて、息も絶えぐくになつたことが一度や二度ではありませんでした。その度毎に、それを見る父や母はどんなに辛かつたこととせう。両親はそれを非常に苦にして、ありとあらゆる手段を盡し抜きました。けれども、田舎にはさうした不具者を教育する處はなし、親類のものはたゞどうしたつて駄目だ」といふばかりでした。しかし、母は彼女に對する熱烈な愛から、何

とかなるといふ信仰を失ひませんでした。そして、なほも心を碎いて治療の方法を盡しました。

その頃Baltimoreバルチモアに有名な眼科醫があつて、全く目の見えないもので、その手術を受けてよく見えるやうになつたものが幾人もあるといふ話が、彼女の両親の耳に入りました。そこで、父は早速娘を連れて態々バルチモアへ行きました。

彼女には、何も見えぬ、何も聞えはしませんでしたけれども、たゞ何となしに旅行を楽しく感じ、そして、汽車の中の人々も大變彼女を可愛がつて、色々な人形を作つて與へました。しかし、それはみんな眼のない人形ばかりでした。彼女は非常にそれを氣にして、眼をつけてくれるやうにと人々に頼みました。けれども、人形に眼をつけてやるものは一人もありませんでした。彼女は泣きました。汽車の中の人達も聲を忍んで泣きました。

バルチモアの眼科醫は、到底駄目だといつて、Washingtonワシントンの盲聾啞教育者アレキサンダー、Alexander Bellベル博士を紹介しました。そして、ベル博士の斡旋で、或若

い婦人が彼女を教育してくれることになりました。その婦人がいよく彼女の家に來るといふ日には、彼女は長い間立關に出て待ちました。やがてその婦人が到着して、彼女を見るや否やしつかりと抱いた時には彼女は喜びのあまりその懷の中で泣きました。

その婦人の來たことは、彼女の生涯を二分する劃期的の出來事でありました。それは彼女が七歳の時でありました。

その婦人は來るとすぐ、美しい人形を彼女に與へました。彼女は非常に喜びました。すると、その婦人は彼女の手を取つて、その掌に *love* と繰返し繰返し書きました。

彼女にはそれが何のことやら少しも分りませんでした。それは、この世に文字などといふものや、言葉などといふものがあるとは全く知らなかつたからでありました。しかし、嬉しいのでその眞似をして見ました。そして、間違なく書けるまで何遍もくくやつて見て、すっかり覺えてしまつた時には、何となく嬉しくて、二階にゐた母にまで書いて見せに行つたほどでした。

た。かうして、*Pin, Hat, Cup* のやうな名詞は勿論、*Stand, Work* などといふ動詞までも覺えて行きました。

或時はあんまり分らなくつて、めちやくちやにその婦人に喰つてかゝり、教へるために渡してくれたものを床の上に叩きつけて泣きました。それでもその婦人が怒りもせず、靜に壞れたものを寄せ集めてゐるのに氣づいて、濟まないと思つて、また泣出すといふやうなことも珍しくはありませんでした。

かうして勉強してゐる中に、彼女はすべてのものに名前のあることを知り、更に善惡とか眞偽とかいふ抽象的觀念のあることまで知りました。これは彼女の稀な聰明と倦まない努力によることは勿論でありますけれども、同時にまた、その婦人の驚くべき獻身的な愛と努力の賜に外ならないのであります。

その婦人の熱心な努力の結果、彼女は文字によつて自分の思想を他人に傳へることが出来るやうになり、また、他人の思想を理解することも出来る

やうになりました。そして、更に様々なことを教はり、遂にはシェークスピア Shakespeare やまでも讀んで貰ふやうになりました。それは勿論、その婦人が本を見ながら、その文字通りに彼女の掌に書き、彼女は自分の掌で讀み且聞くのでありました。

その中にボストン Boston の盲人學校に入り、色々な學問をすると同時に、新しい友を得て、掌による會話をして喜び合ふことが出来ましたが、人間は口を利用して自分の意志を傳へるものであるといふことを知つてからは、普通の人のやうに口を利用して見たくてなりません。それは指先の文字だけでは到底思ふことが言表せなかつたからであります。それに喉も口も少しも悪いのでなく、たゞ耳が聞えないために音が出せないのに過ぎないからであります。

そこで、十一歳の時、更に他の婦人について、發音の稽古をすることになりました。それは教師の唇や舌に觸つて見て、その動く通りに自分も動かして音を出すのでしたが、間もなく、M・P・A・S・T・I といふ六音を發音すること

が出来るやうになり、It is warm to-day. といふ言葉さへいへるやうになりました。その時の嬉しさは到底言葉で表すことは出来なかつたと彼女はいつてゐます。けれども、勿論それは決して普通の人のいふやうな巧みな言方ではありませんでした。

それでも熱心に努力した結果、遂には非常に上達して、色々なことがいへるやうになりました。さうなると、一日も早くそれを母や妹に聞かせたくなり、なりましたので、彼女は遂に故郷へ歸りました。生れて始めて物のいへるやうになつた娘を見て、母はヘレンを抱いたまゝ泣いてしまひました。妹は喜んでその廻りを飛跳ね、父は満足さうに涙ぐんでこの光景に見入りました。

十三歳の時には、小さな物語を書いて多くの人々を驚かせ、やがてフランス語も研究して、讀んだり話したりするやうになり、むづかしいラテン語 Latin へ研究し始めました。

十五歳の時、ニュー・ヨーク New York の聾啞學校に入り、數學・地文學・フランス語及び

ドイツ語などを學びましたが、十七歳の時愛する父に死別しました。死と  
いふことは生れて始めて経験することでしたが、何か非常な悲みを感じま  
した。その年、ハーヴァード大學へ入學するため、ケンブリッヂ學校へ入り  
ました。

かうして遂に大學まで卒業してしまひました。そして、大學卒業後は、あ  
らゆる社會に活動し、人生は恩寵と喜びに満ちてゐるといふ主意の著述を  
發表して、全米國は愚か、廣く世界の驚嘆と渴仰を博してゐます。(少女畫報)

五 青蛙先生

正木不如丘

俺の頭の上には、毎朝さら／＼といふ音がする。その音は一時間近く斷  
續する心持のよい音である。その音が十日近く聞かれなくなると、俺は例  
年のやうに地上に現れるのだ。そのさ／＼やかな音を人間共は全く知らぬ  
地下の冬眠をする種類だけが之を聴くのである。霜柱が夜な／＼立つて、  
又朝日と共に崩れる音が、即ちこの春到るの知らせであるのだ。併し、俺の

正木不如丘  
名は俊二、長  
野縣の人、明  
治二十年生、  
醫學博士、慶  
應義塾大學病  
院内科部長

やうな有能の蛙は出處の時を選ぶ。十日程もその霜柱の崩れる音のせぬ  
のを機として地上に現れるのだ。

俺は乃ち日を選んで、そろ／＼と地表に近づいた。地表下一寸で、俺は靜  
に背に感じる春の日の暖かさを確かめる。即ち一舉にして背の地を押し  
のけて地上に現れた。梅花は既に末に近く、さすがに梅が香はまだ全く去  
らず、若草は寸に近い所もある。俺は背伸をして四圍を見渡した。地から  
生れ出た喜は、俺の鼻口から皮膚から溢れ出す。その喜のやり場に困つた  
時、俺はまづ一躍を試みた。俺の肉體は青春の氣に満ちて居る。俺は序に  
五つ六つ飛んで見た。六つ目に俺が飛んだ時、俺は自分の身が既に田舎の  
庄屋様とも思はれる大家の庭にあるのに氣付いた。すてきな臥龍梅とい  
ふのが、下枝は既に地面に近くまで下つて居る。俺の飛躍本能はいつの間  
にか俺をして又一躍させた。愉快ではないか、俺の二つの前足が物に觸れ  
たと思ふと、俺の嗅覺は強烈な馥郁たる香に刺戟された。と同時に俺の身  
は地に落ちた。兩手の間には一瓣の梅花がある。一二秒遅れて、俺の背に



三片の花弁が散つて來た。俺は第一回の失敗を感じた時又一躍した。成  
功したこと勿論である。俺は努力して小枝を傳つて樹幹に近付いた。俺  
の體內には尙十日間ほど生命を保つに足る榮養が残つて居る。俺の全本  
能は只世に生れ出た喜を心ゆくまで味ふことにだけ向けられて居る。俺  
は樹幹に近付き、それを傳つて高處に登り出した。木登り本能が顯れたの  
である。俺が臥龍梅の天邊まで登るには、可なり時間を要した。氣の永い  
時計が氣永に二時を打つた時、俺は頂上に登つた。庭の外は既に春風駘蕩  
で、菜の花が咲いて居る。畑打の百姓が畦に午睡を貪つて居る。遠く平野  
の果にはまだ頂の白い山が見えたが、さすがに春の山麓は霞んで居る。下  
を見ると、俺の居る臥龍梅の下は池になつてゐて、その真中を緋鯉が愉快さ  
うにばちつと尾で水を叩いては又水に入つて行く。池の隅の浅い處には、  
大きな飯釜が一つ沈んで、その中に愛すべき目高の群が飯粒をばくついて  
居る。俺は春の水だなあと思つて、一句やらうと考へ出した。

飯粒に群るゝ目高や春の水

とやつたが、平凡に過ぎる。

泡浮くと見れば目高や春の水

どうも會心の句にならぬ。頻りに想が浮ぶが、句が纏まらぬ。その時、俺は人間の聲を聞いた。

古池に飛ばぬ蛙の午睡かな

乾からびた聲である。聲のあたりを見ると、七十近い老人が春日を浴びて縁に坐つて、短冊に向つて居る。月並だなど俺は可笑しくなつた。蛙が午睡などする筈がない。

短冊の天地見る眼の日永かな

一句進呈。また老人の聲。

「古池や蛙飛込む水の音か、名句ぢや。山吹や蛙飛込む水の音、派手過ぎる。」

俺も一句進呈、

古池と枕言葉の蛙かな

彼一語拙者一句春日は暮近くなつて來た。庭外を見ると、百姓も既に家路に急ぎ、芹摘の少女子も見えぬ。稍寒くなつて來た。

六 出 廬

土井 晚翠

嗚呼南陽の舊草廬

二十餘年のいにしへの

夢はたいかに安かりし

光を韜み香をかくし

隴畝に民と交れば

王佐の才に富める身も

たゞ一曲の梁父吟

閑雲野鶴空濶く

風に嘯く身はひとり

月を湖上に碎きては

ゆくへなみまの舟一葉

ゆふべ暮鐘に誘はれて

訪ふは山寺の松の風

江山さむる曙の

雪に驢を驅る道の上

寒梅瘦せて春早み

幽林陰を穿つとき

伴は野鳥の暮の歌

紫雲たなびく洞の中

土井晚翠  
名は林吉、仙臺市の人、明治四年生、第二高等學校教授  
南陽 河南省南陽府から湖北省襄縣に至る一帯の地をいふ

誰そや碁局を友の身は

その隆中の別天地

空のあなたを眺むれば

大盜きほひはびこりて

四海今はたさながらに

風の枯葉を掃ふごと

治亂興亡おもほへば

世は一局の碁なりけり

經綸胸に溢るれど

その世を治め民濟ふ

岡も臥龍の名を負ひつ

名利を俗に求めねば

花また散りて春秋の

亂れし世にも花は咲き

うつりはこゝに二十七

信義四海に溢れたる

高眠遂に長からず

背きはてめや知己の恩

君が三たびの音づれを

姿は替へて立ちいづる

羽扇綸巾風輕き

草廬あしたの主や誰

曉さむる西窓の

殘月の影よさらばいざ

白鶴歸れ嶺の松

蒼猿眠れ谷の橋

岡も替へよや臥龍の名

草廬あしたは主もなし

成算胸に藏まりて

乾坤こゝに一局碁

たゞ掌上を指すがごと

三分の計はや成れば

見よ九天の雲は垂れ

四海の水は皆立つて

蛟龍飛びぬ淵の外

(天地有情)

現代女子國語讀本 卷十 終



常用漢字及略字 (臨時國語調査會決定)

(一) 常用漢字 (千九百六十二字)

【一】一丁七丈三上下不  
世丙並【一】中【一】丸主  
【二】久乏乘【乙】乙九乞  
也乳亂【丁】了事【二】二  
云互五井【乙】乙交京亭  
【人】人仁仇今介仕他付  
仙代令以仰仲伴任企伊  
伏伐休伯伴伺似但位低  
住佐何余佛作使來例侍  
供依侮候侵便係促俊俗  
保俠信修俳俵倂併倉個  
倍倒候借倫假偉偏停健  
側偶傍傑備催働傳債傷  
傾僅像僚僞僧價儀億儉  
儒償優【凡】元兄充兆兕  
先光兌免兒兕【入】入内  
全兩【八】八公六共兵具

典兼【口】冊再【一】冠  
【シ】冬冷涼准凌凍凝  
【凡】凡【口】凶凸凹出  
【刀】刀刃分切刈刊刑刻  
初判別利到制刷券刺刻  
則削前剛副割創劇劊劑  
【力】力功加劣助努効勅  
勇勉勳勸務勝勞募勢勸  
勳勵勸【ク】勺夕包【ヒ】  
化北【口】匹區【十】十千  
升午半卑卓協南博  
【卜】占【口】印危却卵卷  
卽卿【一】厄厘厚原【ム】  
去參【又】及友反叔取受  
叛【口】口古句叫召可叱  
史石司各合吉同名后吏  
吐向君吞吟否含呈吸吹

告周味呼命和咽哀品員  
哲唐唱商問啓善喉喜喪  
單嗣嘉嘗噐噴嚴囁【口】  
囚四回困困國圍園圍  
圖團【土】土在地坂均坊  
坐坑坪垂型垣埋城域執  
培基堀堂堅堤堪報場塔  
塗塚塵境墓塚增墨墮壁  
壇壓壤【土】土壯壹壽  
【又】夏【夕】夕外多夜夢  
【大】大太太夫央失奇奉  
奏契奔奢與奪獎奮【女】  
女奴好如妃妊妙妨妹妻  
妾姉始姑姓委姦姪姬姻  
姿威娘娛娠婚婦媾媒嫁  
嫉嫡嫌孃【子】子字存孝  
季孤孫學【一】宅宇守安

完宗官定宛宜客宣室宮  
宰害宴家容宿寄密富寒  
察寡寢實審寫寬實【寸】  
寸寺封射將專尉尊尋對  
導【小】小少尙【九】就  
【尸】尺尼尾尿局居屈屈  
屋展層履屬【山】山岡岩  
岬岳岸岬峯島峽崇崎崩  
嶮【川】州巡集【工】工  
左巧巨差【己】己【巾】巾  
布帆希帖帝帥師席帳帶  
常幅幅幕幣【干】干平年  
幸幹【么】幻幼幾【一】床  
序底店府度座庫庭庶康  
廉廊廟廢廣廳【之】延廷  
建廻【廿】弄弊【弋】弋式  
【弓】弓弔引弘弟弱張強

彈【彡】形彩影【彡】役  
彼往征待律後徐徑徒得  
從御復循徵德徹【心】  
心必忌忍志忘忙忠快念  
忽怒思急怨怪怯恐  
恥恨恩恭息悅悔悟患悲  
悼情感惜惠惡惱惱想愁  
愉意愚愛感慈慈慕憐慢  
慣慨慮慰慶慈愛憐憐憐  
憶憾憤懇應懲懷懸戀  
【戈】成我戒威戰戲戴  
【戶】戶房所【手】手才  
打托扱扶批承技抑投抗  
折抱抵押抽拂拍拒拓拔  
拘抽招拜括拳拾持指振  
捌捕捧捨掃授掌排掘掛  
採探控推接提揚換握揭  
揮援損搖搜摘携摩撫擇  
擊操擔據擬擴攝【支】支  
【支】收改攻放政故效斂

教敏救敗敢散敬敵數數  
整【文】文【斗】斗料斜  
【斤】斤斤斬新斷【方】方  
施旅旋旗【无】既【日】  
日且旨早旬旭昇昌明易  
昔星春昨是時晚晝普景  
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆  
曇曜【日】曲更書曹會替  
最會【月】月有朋服朕朝  
望朝期【木】木末末本札  
朱机朽杉李材材杖束柿  
杯東松板枕林枚果枝枯  
架柄某染柔查栝柱柳栗  
校株根格栽栽案桐桑楠  
梅條梨梯械棄棋棒柳棟  
森栢植楠極檠檠構檠樂  
槿樓標樞樞樣樹橋機橫  
檄檄檢櫻欄權【欠】次欲  
款欺歌歎歐歡【止】止正  
此步武歲歷歸【夕】死歿

殊殉殖殘【支】段殺殼殼  
毀【毋】母每毒【比】比  
【毛】毛毫【氏】氏氏【氣】  
氣【水】水水永汁求汗汚  
江池決汽沈沒沖沙河沸  
油治沼沿況泉泊法波泣  
泥注泰泳洋洗津洪洲活  
派流浦浪浮浴海浸消涉  
液淑淚淡淨淫深混清淺  
添滅渡温測港渴游湖湧  
湯源準溝溢溶溺滅滋滑  
滯滴滿漁漂漆漏演漕漢  
漢漫漸潔潛潮澤激濁濃  
濕濟濫瀆灌灌澗【火】火  
灰災炊炎炭烈烏無焰然  
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱  
燃燈燒營燭爆爐【爪】爪  
爭爲爵【父】父【片】片版  
牌牒【牙】牙【牛】牛牧物  
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狹狠猛貓狗猿猴獨  
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉  
王玩珍珠班現球理琴  
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘  
甚【生】生產甥【用】用  
【田】田由甲申男町界畏  
烟畔畜畝略番畫異留當  
疊【疋】疋疎疏疑【疋】疫  
疲疾病症痕痘痛痢療  
【疋】登發【白】白百的皆  
皇【皮】皮【皿】皿盆益盛  
盜盟盡監盤【目】目盲直  
相省眉看真眼眺眼着睡  
督睦睦【矢】矢知短【石】  
石砂砲破研硬硯碁碎碑  
確磁磨礎【示】示社祈祕  
祖祝神票祭祭禍福禦禮  
【禾】秀私秋科秒租稈秩  
移稅程種稱稻稼稿穀  
積穗穩【穴】穴究空穿突

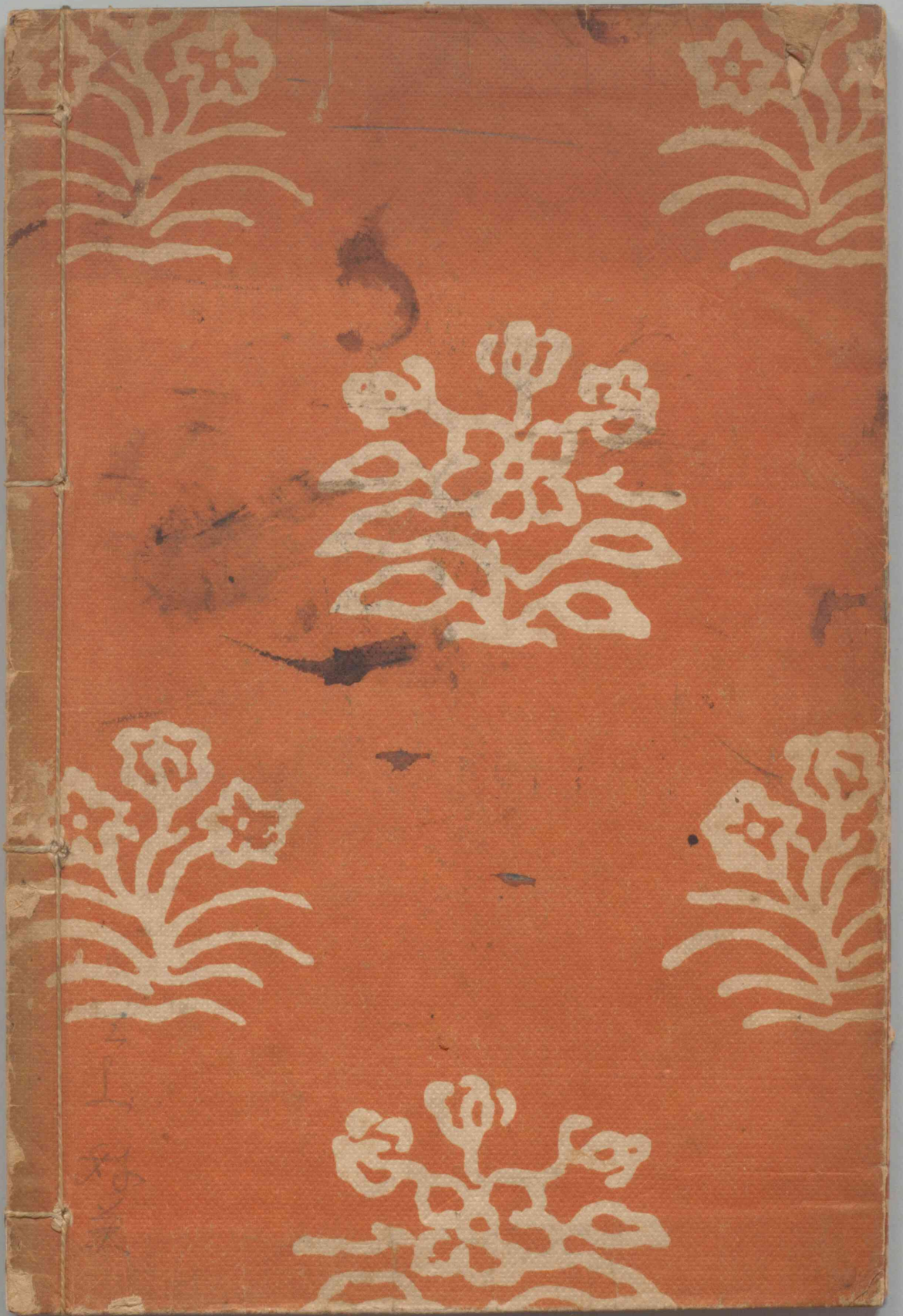
窈窕窗窮【立】立章童端  
競【竹】竹竿笑笛笠符第  
筆等筋筒答策筒算管篇  
箱節筵築篤簡簿籍【米】  
米粉粒粘粗粟粹精糖糞  
【糸】系紀約紅紋納純紗  
紙級紛素紡索紫累細紳  
紹糾終組結絕絞絡給統  
絲絹經綠維綱綢綴綻綿  
緊絡線緋綠編綴緯練縛  
縣縫縮縱總績繁織繕繪  
繭線繼纂續【缶】缺【罔】  
罪置署罰罵罷羅【羊】羊  
美羣義【羽】羽翁翬習翼  
【老】老考者【而】耐【耒】  
耕【耳】耳耽聖聘開聯聲  
職聽【肉】肉肋肖肝股肥  
肩肯育肴肺胃背胎胞膈  
胸能脂膈脈脊脚脫腎腐  
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

膳膽臆臟【臣】臣臥臨  
【自】自臭【至】至致臺  
【日】日與男與舉舊【舌】  
舌舍【舛】舞【舟】舟航般  
舵船舶艇艘艦【艮】良  
【色】色【艸】芋芝花芽芳  
苑苗若苦英茂茶草荒荷  
莊莖菊菌菓菜華萩萬落  
葉著葬蒔蒙蒸蓄蓮蔓蔭  
薄薦薪藍藏藝藤藥蘇  
【虫】虎虐處虛虜號【虫】  
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻  
【血】血衆【行】行術街衝  
衝衝【衣】衣表衰袂袋袖  
被袴裁裂裏裕補裝裸製  
複襖【高】西要覆【見】見  
規視親覺覽觀【角】角解  
觸【言】言訂計討訓託記  
詠訪設許訴診詐詔評詞  
詠詠試詩詰詰詳詠詠誌

認誓誣誘語誠誤誦說課  
誼調談請諒論諫諫諸諾  
謀謁謂謙講謝諂諛證識  
譜警譯議護譽讀變讓  
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豚  
象豪豫【貝】貝貞負財賈  
貧貨販賈賈賈貳貴賈賈  
費賈賈賈賈賈賈賈賈賈  
賞賈賈賈賈賈賈賈賈賈  
【赤】赤赦【走】走赴起超  
越趣【足】足距跡路踊踏  
蹟蹴躡【身】身【車】車軌  
軍軒軟軸較載輔輕輝輦  
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯  
【辰】辰農【毛】毛込迂迎近  
返迫迭迷迷追送送迷迷  
透透途通速造逢連週進  
逸逸遇遊運過道達達遙  
遞遞道適運運遷遷選選  
還邊【邑】邑那邪邨郊邨

郡部郵邨鄉【酉】酌配酒  
酢酬醕醕醕醕醕【采】釋  
【里】里重野量【金】金釜  
釘釘鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞  
銘銘鋒鋼錄錄錄錄錄錄  
鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑄鑄【長】  
長【門】門閉閑閑閑閑閑  
閱閱關【阜】防附降限陸院  
陣陣除階階階階階階階  
隅隅隆隊階階階階階階  
險險隱【隹】隹雀雄雅集履  
雌雙雞離離【雨】雨雪雲  
零雷電雷雷雷雷雷雷靈  
【青】青靜【非】非【面】面  
【革】革靴鞍【音】音響  
【頁】頁頂項順須頓預頰  
頰頰頰頰頰頰頰頰頰頰  
顧顧顯【風】風【飛】飛翾  
【食】食飢飲飯飾養餓餘  
餅館饅【首】首【香】香





Large central white stylized floral/geometric motif.

White floral/geometric motif in the bottom-left corner.

White floral/geometric motif in the bottom-right corner.

White floral/geometric motif in the top-right corner.

White floral/geometric motif in the top-left corner.

White floral/geometric motif in the top-right corner.

Small vertical text on the left edge of the cover, possibly a title or author's name.